

ISSN 0910-3090

國語問題協議會報

平成十九年十二月二十五日發行

國語國字

第百八十九號

目次

題字 近藤祐康

講演 第八十回國語講演會 平成十九年五月二十六日

私の表記法式

高島俊男……………一

「敬語の指針」は「破壊の指針」

萩野貞樹……………八

寄稿

近代化及び現代に於ける歴史的假名遣の意義

南 敏雄……………一六

青少年のための假名づかひ問答

山本直人……………一九

言葉の雑學 (九)

鹽原經央……………二七

聖書に於る國語問題 (その七)

「アブラハム イサクを生み」

松岡隆範……………三二

契沖と悉曇 (その二)

谷田貝常夫……………三五

縦書きによる理解と表現

若井勲夫……………三八

〈文語の苑〉の四年

愛甲次郎……………四二

世田谷區日本語教科書瞥見

上西俊雄……………四四

錠

高崎一郎……………四七

福田恆存と俳句

鈴木由次……………四九

受賞

「白川靜賞」を受賞

—植福の教育に邁進したい— 土屋秀字……………五一

書評

萩野貞樹「旧かなづかひで書く日本語」

上田博和……………五二

俳句・和歌投稿……………五三

後書……………五六

正統表記のための實用工具紹介……………五八

私の表記法式

高島 俊男

高島でございます。

實はぼくは、この國語問題協議會の初めごろの會員なんです。です。

もつとも、國語問題協議會ができたのは昭和三十四年の十一月なんです、その時にはぼくは知らなかつた。

翌三十五年——いまから四十七年も前ですね——に新聞か何かで知つて、入れてもらひたいと思つたんですけど、その國語問題協議會がどこにあるのかわからない。理事長が小汀利得さんとあつて、小汀さんは日本經濟新聞の社長だといふことは知つてゐたから、日本經濟新聞の所在地をしらべて、日本經濟新聞社小汀利得様あてに手紙を出した。

當時のことを思ひ出さうと思つて日記をさがし出したんで以下ちよつと讀みます。昭和三十五年九月十一日のぼくの日記です。

昭和二十五年九月十一日(日)

へ國語問題協議會といふ會ができて、國語改革の行過ぎ

私の表記法式

に反對する運動をしてゐるといふので、参加させて貰ふべく、事務局も何も判らぬので、理事長の小汀利得氏に手紙を出しておいたところ、きのふになつて入會案内その他を送つて來た。そのうち國語問題の歴史、といふのは明治以來の主要なできごとを要領よくまとめてある。もう一つ、ある小學校の先生の書いた「小學校に於ける漢字教育」といふ論文がはひつてゐて、これは近頃になくおもしろい、また痛快な讀みものであつた。小學校の國語教育は、まづ漢字より始めて、後でかなを教へるべきである。また、漢字の提出數は多い方が有効で……

その三か月後、十二月十四日の日記です。この日第二回の講演會がもよほされた。この日は水曜日です。

へ午後半休をとり、國語問題協議會の講演會及び總會に出る。講演會は一時より千代田公會堂にて講師は成瀬正勝、石井勳、辰野隆、平林たい子、小泉信三、大野首の

諸氏。

成瀬正勝氏は、半分ぐらゐしかきけなかつたが明治以降の國語改革論の問題點について、石井勳氏といふのは、小學校の一年生に漢字教育をやつてゐる人で、この人の書いたパンフレットを讀んで快哉を叫び松井に電話して讀ませてやつたことがある。辰野氏は、主としてフランス人が如何にフランス語を愛してゐるかといふことを、自分の留學時代の經驗や、ドーデーの小説をひいて語られた。ついでに山手線は山の手線でなければならぬといふやうなことを二三、平林たい子さんは漢字制限の不當を鳴らす。小泉信三氏は正しい國語を重んじ、人がまちがへるからと云つて忽ちそれを正當なものとして認めるやうな態度は許容し難いと論ぜられた。大野晋氏は松井の先生だが、國語改革が随分いゝかげんなやり方で行はれたことを衝き、充分な調査と慎重な検討を経て、たとへば當用漢字や字體を變改したものについては、その一つ一つについて、納得のゆく根據が示されなければならぬといふのである。

そのあと、麻布の國際文化會館なるところで總會あり。かなりの數の會員が出席することと思つてゐると、ほとんどが理事、評議員といつた人たちで、平會員は僅かだ

あり、更に二十歳代と思はれるのは、僕を入れて二人だけであつた。名前を聞いた覚えのある人と云へば、小汀利得、福田恆存、市原豊太、時枝誠記、木内信胤、田邊萬平といつた人たちである。小汀さんは大層鼻息が荒く、もう荒木君（文部大臣荒木萬壽夫のこと）とは腹は合つてゐるんだなどと氣焰を吐く。一番悲觀的なのは時枝さんで、この人は以前、國語審議會に加はつてゐて、何を言つてもムダなのでやめ、この席でも、もう駄目です、これだけ使はれ出してしまつてはもう仕様がなと言つて、散々に叩かれ突上げられ、それでもニヤニヤ笑つて、もう駄目ですと云つてゐる。憲法違反の提訴をしようといふ人もある。市原さんといふ人は一見野暮なをぢさんみたいな人で、はじめ同じ車で會場へ乗りつけ、他の人の來るのを待つ間、何氣なく話をしてゐて、後で名前をきいて恐縮したが、どうもわれ／＼のやつてゐることはゴマメの齒ぎしりのやうな氣がしてならぬといつて、これが大部分の人の實感のやうであつた。

この日のことは、もう五十年にちかくなりますが、部分におぼえてゐます。一つは小泉信三先生が講演に出てこられたことです。空襲で顔にひひやけどをしてめつたに

人前には出られぬのだが、國語の問題は黙視できないと出てこられた。

あとは日記にもありますが時枝誠記先生が、ニヤニヤ笑ひながらもうダメですをくりかへしてをられたこと、市原豊太先生と話したことですね。時枝先生の「もうダメです」も市原先生の「ゴマメの齒ぎしり」もその通りです。國語問題協議會、あるいはそれもふくめた反對の聲が、いくら正しくても、理論で勝つても、蛙のツラにシヨンペンで相手はへつちやらなんです。もう政令が出て、官廳と新聞と學校教育の三要點をおさへて、そこで日々おこなはれてゐるのですから。

しかし、新かなづかひ、當用漢字が實施されて、六十年たつて、その間急所をおさへられてゐるにもかかはらず反對の聲がとぎれることがなかつたといふのは偉大なことです。

今になつて思ふと、「もうダメです」はその通りなんですが、まつたくダメなのはかなづかひで、漢字は少しはよくなつてきた。

かなづかひは、阿川弘之先生や丸谷才一先生のやうに正かなづかひで作品を發表していらつしやるかたもあるし、新聞雜誌にのせる論文を正かなで書いてゐる人もある。し

かし全面的に、つまり日本人全體が正かなにもどるといふことはもうあり得ません。

それぢやほろびるかといふと、ほろびることもない。「ふつうのかなづかひより一段高級な、ふつうの人は到底書けない書きかた」として生きのこるでせう。いまでも、一時にくらべれば尊重されてゐます。一昔前は、正かなしか書けなくて、古くさいと笑はれて恥入つてゐる人がいくらかでもあつたが、いま正かなで書く人は、意識して書く人、いはば確信犯です。それだけ少くなつた。だから尊重されるのです。つまり、尊重される位少くなつちやつたのだから、全面的にもどることはあり得ない。

漢字は、昔は當用漢字の枠といふのがきびしくて、枠外の字は使へない、書いてもかなにされてしまふのがふつうだつたが、いまはもう枠があつてなきがごとしです。これは當用漢字の「制限」から常用漢字の「目安」になつてからの趨勢です。いまは新聞も平氣で枠外の字を見出しに使つてゐる。

だから、枠の問題は樂觀していい。

字體の問題は、全面的にもとにもどることはあり得ない。しかし、表外字はよい傾向にあります。擴張新字體——この擴張新字體といふ呼稱は、朝日新聞のばあひは一般に

「朝日文字」と呼ばれてゐた。ぼくは「類推字」と言つて
ます。どう呼んでも同じです。新字體にあはせて、表外字
まで新字體にするものです。J I S がこれをやつたものだ
から、パソコンで文章を書く人は、否應なく（たいがいは
無意識裡に）拡張新字體を使はされることになつた。

最近、朝日が朝日文字を撤回した。これはいい傾向です。
康熙字典體にもどすと言つてゐる。康熙字典體といふと大
げさでむづかしげだが、要するに新字體になる前の字にも
どすといふことです。

たとへば葛城とか葛飾とかの「葛」の字。この字は「當
用漢字」にはないが、同じ部分を持つ「掲」、新聞に掲載
するの掲の字は當用漢字に入つた。その際新字體「掲」に
した。人を書いてその左部から下部にカギをかけてゐたの
をカタカナの「ヒ」の字にした。

當用漢字の新字體といふのは不愉快なもので、一點一畫
をへらしたりふやしたりしたものがたくさんある。ちよつ
と見ただけではわからない。よく見ると點が一つなくなつ
てゐたりする。掲も一畫へらして掲にしたのですが、それ
にあはせて、同じ部分を持つ「葛」も「葛」にした。

かういふのをもうやめまずと朝日新聞は言つてゐる。
パソコンのことはぼくは無縁で知らないのですが、新し

いになるとだんだんやめる方向へ行くらしい。よい傾向
であります。

當用漢字の新字體といふのはムチャであつた。拡張新字
體はもつとムチャであつた。

手書きで漢字を書く際は、前後関係でわかりさへすれば、
字體はどう崩しても略してもいいのです。實際昔から人々
はさうして來てゐる。

當用漢字は印刷字體をその手書きにあはせようとした。
これはきりがいい。それに手書き字は曲線で書かれるから
略しても崩しても美しいが、印刷字體は直線の組合せだか
ら美しくない。中國でも日本と同じころに「簡體字」と稱
する略字を作つたが、これは手書き字にあはせることを日
本よりさらに極端にやつたために、見るにたへぬほど醜惡
です。

その代り中國のいいところは、本でも町の看板やなんか
でも正字（繁體字といひます）がほとんど用ゐられてゐる
ことです。

ぼくの表記方式について申します。

かなづかひについては、日記や手紙は正かな。公に發表
するものはやむなく大勢順應で原則新かなですが、一人

「づを守る會」といふのをやつてゐる。つにテンテンのづです。一人づつ、五軒づつなどのづつは「づ」を書く。うなづく、つまづくなども「づ」を書く。

これは、以前には原稿に「づ」を書いておいても「ず」に直されたものだが、ちかごろは編輯者もだんだん筆者の表記を尊重するやうになつて、直されることはありません。漢字については、自分で立てた原則がいくつかあります。

その一。合併字を使はない。合併字といふのは、二種以上の字を併せて一つにしたものです。これは、中國ほど多くはないが、日本にもあります。

缺と欠りん。常用漢字では缺の字を追放してしまつて欠をケツとよませ訓のカケルもこの欠の字を書く。これも手書きにあはせたものです。ほくは、缺點とか補缺とかちやんと缺の字を書く。欠はまづ用途がありません。あくびを欠伸と書くが、ほくは、和語はなるべくかながきといふ考へだから漢字では書きません。

この缺の左の缶は音フで、土器のこと、それに物事の一部缺損を意味する「夬」が右側について、物事の一部がかける意味をあらはす。

この缶をちかごろはカンヅメのカンとよんでゐる。これはひどいね。缶は部首になつてゐて、それに音符の韮が右

について罐です。つまりカンといふ音はこの右側にある。缶だけではカンの音はない。もちろんほくは書きません。これも一種の合併字ですね。

藝と芸げん。これはみなさんよくごぞんじだと思ふ。クサカンムリに云々の云を書いた字はウンですよね。雨カンムリなら雲、つまり風雲のウンで、云はウンの音をあらはす。

藝術の藝の字は書くのに少々手間がかかるので手書き字では昔からいろんなふうに略して書かれる。その一つが中を抜いて上のクサカンムリと下のウンだけを書くもの。だから手書き字としてはあつた。藝人とか何とかを手つとり早く書く時にね。しかしそれを正しい字體にしてしまつたのはひどい。

これは納得できない人が多くて、いま出てゐるふつうの本でも、この字だけはもとの字の藝を使つて、文藝とか藝術とか書いてゐる人はありますね。ほくもさうします。

芸のほうは香りのよい、蟲よけになる草ですね。芸亭とか芸閣とかいふのは圖書館です。本を守る芸草の香りがしますからね。

いくつもの字をあはせた合併字は「弁」です。これは、本来の弁と、それに辨別の辨、辯説の辯、花瓣の瓣をあはせてある。これは、本来の弁以外は書くのに手間がかかる

めんだうな字だから手書きの時に略字を書くのはやむを得ない。印刷字體はもとのままとしておいたほうがよかつた。音は同じだけど意味がちがふんだから。

最近出た秋山豊さんの『漱石という生き方』（トランスビュー）、秋山さんは長く岩波書店で漱石全集一筋にやつてこられたかたですが、新しい漱石全集（初めて新字體を使った）で、この弁の字に惱んだと書いていらつしやる。

花瓣は新字體では花卉になるわけだが、漱石は瓣の一字で「はなびら」とよませることがあるので、この字はのこした、と書いていらつしやる。

合併字といふのは二つ（あるいはそれ以上）の字を一つにしてしまふのだから、不都合がおきやすい。ぼくは合併字は使はない、なるべくもとの字を用ゐる、といふ原則で書いてをります。

つぎに書きかへ字を書かない。これは、一つの熟語のうち一字が常用漢字外で使へなくなつたので、同音の別の字でおきかへたものです。政府がきめたのがざつと三百語くらゐあり、新聞その他がまねをして作つたものもあつてこれはずいぶん数が多い。

たとへば交叉點。交叉するといふのはぶつちがふことで

す。ところがその又の字が表外字になつたので交差點と書く。これでは意味をなさない。差といふのは、背の高いやつや低いやつがゐるといふことです。もちろん人間だけぢやなく草や木のばあひにも高低差があるのを差があるといふ。

ところが道がクロスする所といふのは別に高低差があるわけぢやない。サといふ音が同じだから持つてきただけです。それぢや交左點でも交査點でもいい。そんな無茶な話はない。

また、拔萃。萃は草むらです。草がたくさん生えてゐる。そのなかに何本か、他より抜きんでてゐるのがある。それが拔萃です。その萃の字が表外字になつたので抜粹と書く。どちらもスイ、音が同じだといふだけで意味がちがふ。抜粹、粹を抜くなんて言葉はない。

あるいは掩護。掩はおほふといふ意味です。味方を守るために、他方面から敵を攻撃して、極力前方にゐる味方に敵の直接攻撃がおよばないやうにするのが掩護です。たとへば味方の背後から頭越しに敵軍を砲撃する。あるいは飛行機を飛ばして味方と對峙してゐる敵を上空から攻撃するやうなのが掩護です。ところがこの掩が表外字になつたので「援護」と書く。援は手を引くといふことです。手をさ

しのべて助力するのが援護です。まるで意味がちがふ。

その他、義捐金を義援金とか、訣別を決別とかひどいのが多い。音さへ同じならいいといふ考へで、文字の持つ意味を考へてゐない。ぼくはさうした書きかへ字を書きませぬ。

そのほかいろいろ自分で決めて編輯者に要求する表記法があります。原稿を依頼された時にまづ相手に渡す書きつけがありますので、それをコピーしてお目につけ、多少説明をつけ加へませう。

編輯者、校関係との悶着が絶えないので、原稿を書く前に、文章に手を加へないことをお約束いただきたいと思ひます。お約束いただければ書きます。なほゲラに手が入つてゐたり、書いて送つたあとで變改の要求があつたりしたばあひは原稿をひきあげます。その際、約束通り書いたのだから、原稿料はいただきます。手を加へるとは左のやうなことをさします。矢印の先が編輯者等による改變（もしくは改變要求）例です。

(一) おくりがな

終る ↓ 終わる、落す ↓ 落とす、など

(二) ふりがな

安堵した ↓ あんど（安堵）した、
付度する ↓ そんたく（付度）する、など

(三) かな用法

一人づつ ↓ 一人ずつ、つまづいた ↓ つまづいた、など

(四) 漢字

假定 ↓ 仮定、缺陷 ↓ 欠陥、など

(五) 用語

支那 ↓ シナもしくは中國、朝鮮人 ↓ 韓國・朝鮮人、
大東亞戰爭 ↓ 太平洋戰爭、土人 ↓ 住民、

部落 ↓ 集落、酋長 ↓ 首長、低能 ↓ ちえおくれ、

毛唐 ↓ 西洋人、

女中もしくは下女 ↓ おてつだいさん、など

(六) 數

十人 ↓ 一〇人、昭和四十二年 ↓ 昭和四二年、など

(七) 讀點

二三軒 ↓ 二、三軒、五六百人 ↓ 五、六百人、など

たいそう長くなりました、これで終ります。有難うございました。

（たかしまとしを・中國文學者）

「敬語の指針」は「破壊の指針」

萩野 貞樹

萩野でございます。

ここで「指針」といひますのは今年の二月文化廳から答申されました例の「敬語の指針」のことです。柱が幾つかあるわけですが、世間で注目されたのは「美化語」の新設、それから「謙讓語」を「謙讓語Ⅰ」と「謙讓語Ⅱ」の二つに分類したといふことでした。あれはよく見ますと實にとんでもない部分がたくさんありまして、私はいろいろな機會を捉へて何度も同じことを言つてみます。いろんなところで、何度も同じことを言ふんです。だから、聞く人からみればまたかといふことになる。しかし、それはいいと思ふんですね。世間の偉い人にも、同じことを何度でも言ふ人はあります。といふわけで、のつけから言譯になるのですが、例へば私なんかが最も尊敬する一人に山本夏彦さんがあります。同じことを何度でもおつしやいますね。渡部昇一さんなどもさうでせう。渡部先生の方は同じ主題について何度も書いたり喋つたりすることを求められますから、

結果的に同じことを喋るといふことになると思ふんですけども、山本夏彦先生などは、特別これについて語つてくれと要請されなくても自ら同じことを何度もおつしやいます。例へば「汚職は國を滅ぼさないが、正義は國を滅ぼす」とかですね。「春秋に義戰なし」とか、「美しければ全てよし」とか。

人間がどうであつても例へば永井荷風の文章などを讀むと、讀むだけで陶然としないことはない、美しければすべていいんだと。さういふことを何度でもおつしやる。私が同じことを言ふのは、この山本先生の眞似と思つていただきたい、とまあ願ひしておきます。といふ次第で、私は美化語を新設するなんてとんでもない、けしからんことだと繰り返して申しあげるのです。

それから敬語の謙讓語といふのは受け手を尊敬しない。「受け手尊敬」は成立たない、といふのを私は昔から何度も言つてをります。しかしなかなか傳はらない。

本當に世間には言葉といふものは傳はらないものです。これは敬語の問題と直接關係ありませんが、平成十三年に國會の討論を聞いてゐて非常にびっくりしたことがあります。豫算委員會だつたか文教委員會だつたか、民主黨の竹村泰子といふ議員が質問に立つたんです。そして日本の教科書では昭和十二年の日支事變について教科書が「中國大陸を侵略した」と書いた。ところが文部省の検定意見がついてそれを「進出」に變へさせたといふ話が昭和五十七年にありましたね。ところが、あれは忽ち事實ではないといふことがはつきりして當時の小川文相が「さういふ事實はない」と言つてゐたのです。その新聞記事は一段で五六行のものです。朝日新聞でしたか。ところが實際に「進出」に變へさせたといふことで大變な國際問題になり、連日の大騒ぎになりました。ところが、あれは事實ではありませんから、産經新聞が間もなく一面の眞中に大きなスペースを取つて謝罪の社告を出したんです。これは間違ひだつた。それからテレビで渡部昇一先生がきちんとおつしやつたんですね。そんな事實はない、「侵略」を「進出」と變へさせた事實はない。昭和五十七年の夏の段階ではつきりしてゐた。その後教科書の歴史記述が話題となる度に、あれは事實ではないんだといふことを、我々は新聞・雑誌

「敬語の指針」は「破壊の指針」

ほかのメディアでは何十回と見てをりました。これは一般の人の完全に常識になつてゐる……と思つてゐたのです。

それが平成十三年、竹村議員は「教科書では侵略を進出と書き換へさせたといふ事實があつて」云々といふ風に質問をしたわけですね。さうしたら、時の文部大臣の町村さんが、「あれは事實ではなかつたんでしてね」てなことを、ぼそぼそとおつしやつた。僕がびっくりしたのはその後なので、この竹村議員は非常にびっくりして、文相の答辯には驚いた、あれが誤報だつたなんていふ話は聞いたことがない、本當だとすれば重大な事であるから、事實を自分が調べると、かう言つたんです。國會で質問をするやうな人が昭和五十七年にはつきりしてゐたことを、平成十三年になつても、まだその事實を知らずに、それに關聯した質問を國會でするといふ事實を目の當りにして非常に驚きました。つまり情報といふものは、世間には傳はらないんです。百回云つても駄目ですね。渡部昇一先生といふ、大變な影響力のある人が何回言つても代議士の耳には入らない。そこで私はもう一度言ひますが、「美化語」といふのは怪しからん、とんでもない話である……。

美化語といふのは、昭和三十八年ごろだと思ひますが、辻村敏樹といふ人が提唱した考へ方です。早稻田の先生で

敬語論の權威者としてずっと君臨してゐた方です。その人の弟子筋の人が今や中心になつてをりますけれども、例へばお茶、お米、お酒、お天気、おビール、お水……さういふ「お」のついたものは、別に誰を尊敬して言つてゐるのでもない。ただ「米」と言はずに「お米」と言ふのは、自分の言葉を飾るためであつて、他に對する敬意がそこに入つてゐるのではない。自分の言葉を上品に見せるための表現である。さうである以上、これは美化語と位置付けるべきだ、といふのが美化語の定義なんです、それが今年の文化廳の「敬語の指針」で、權威を持つた形で國民に示達されたわけです。

これは非常に不思議な考へ方であつて、彼らが必ず例として擧げるのは「お米」「ご飯」です。「ご飯」は、確かに、誰か特定の間を尊敬して使ふ尊敬語ではありません。それはさうなんです、が、「米」といふもの「飯」といふものに對する、我々日本人の尊重の心、それは大切に扱ふべきものだといふ感覺、さういふものが自づから言葉となつて表はれたものであつて、我々は確かに「米」といふ言葉も使ふし、「お米」といふ言葉も使ふ。「めし」とも云ふし「ご飯」とも云ひますが、「ご飯」と云つたとき、或いは「お米」と云つたときには、食事、米といふものに對する

天地自然の恵みへの感謝とか、米、飯が私たちの口に入るまでに様々に調べてくれる両親、世間の人たち、お百姓さん、流通機構とか、さういふ風な様々なものに對する感謝と尊重、さういふ心があつて初めて「お米」なり「ご飯」なりといふ言葉が我々の口から出て來るわけであつて、つまり尊敬してゐるのですよ。「お水」なども同じことで、世の中のあらゆる仕組が働き、多くの人が働き、さうしてやつとわれわれは水を飲むことができる。我々は感謝してゐるわけです。有難いと思つてゐる。だから「お水」といふ言葉が自然に出るのです。さういふ意味で「お米」「お水」「ご飯」はみな尊敬語と分類されるべき敬語なんです。さういふ風に位置づければ何の問題もないはずであるのに、文化廳の「敬語の指針」に、自分自身の言葉を飾るためのものであると、はつきりと提示してゐる。人への感謝なり敬意なんでもものは一切そこには入らない——かういふ定義になつてゐるわけです。つまり、我々がお百姓さんに對して、或いはそれを調べてくれる親や家族に對して感謝と敬意を持つて「ご飯」「お米」といふ言葉を使つたとすれば、それは敬語法上の間違ひであるといふことになる。それが文化廳の考へ方です。

文化廳が出したパンフレットで「敬語」といふのがあり

ますが、「自分自身の言葉の飾り」と書いてある。それから今度の「敬語の指針」を出したその委員の主要メンバーの一人である東大教授の菊地康人といふ人。この人は「國文學」といふ雑誌の論文の中で「きれいに上品に述べるもので、敬意や丁寧さの表現ではない」と明言してゐる。

それから美化語の考へ方を定着させるのに大きく功績があつた人に大石初太郎といふ、専修大の教授などを長く務めた人がありますが、この人の表現では「自分のことばの品位のために使はれるものである」と、これまたやたらにはつきりしてゐる。

あくまで自分なんだ。自分を飾るためのものなんです。北原保雄といふ人があります。比較的最近まで筑波大學の學長をやつてゐました。國語學者です。筑波大學は昔の東京教育大學ですね。教員養成のための最高學府です。この北原保雄の定義によれば、お米、ご飯の類は、上品な物云ひをして自分の品位を高めるための表現である。かう云つてをります。彼らの考へ方がどういふ具合になつてゐるか大體お解りだと思ひますが、このやうに飽くまで自分のことであつて、他への敬意、尊重、尊敬、感謝——さういふものは一切含まれてゐないといふ考へ方です。それが美化語です。私はそれを批判して三十年四十年にもなるわけ

ですが、誰も考慮してくれない。それで遂に文化廳の方針になつてしまつたのです。

文化廳の方針といふのは最高のものでして、今後、小學校、中學校、高等學校の國語の教科書は全てこれを採用しなければならぬことになるでせう、恐らく。となると、どういふことになるかといふと、子供達は、お米、ご飯、お水などがある尊敬の念を持つて使へば敬語法上の間違ひである。言ひ換へれば、さういふものに尊重の念を持つてと自體が間違ひである——さういふ風な常識がこれから若い人達に植ゑつけられて行くわけです。

北原保雄さんは「いただきます」といふ言葉にも疑問がある、と云つてゐます。「いただきます」といふのは自身飾りに過ぎない、自分を上品に見せるための表現に過ぎない、だから何かに對する尊重の念があるといふのは間違ひである、といふのです。ご飯の時に「いただきます」と云つて何かを尊ぶなどといふことは間違ひだ、といふことになる。

さう云へば近ごろ學校の給食で先生が生徒に「いただきます」と云はせようとすると「そんなこと云はせるな」とねだこんで来る父兄があるさうですね。それで「困つた父兄だ」と云ふ人もあるんですが、何のことはない、文部省

が率先してさういふ人達を育ててゐるわけですね。文部省と學者が。また敢て云へば僕以外の國語學者が。わざわざさういふ人を造つてゐるわけですよ。どうも美化語はけしからん。さういふことです。

「受け手尊敬」は成立たないといふことは、ちよつと一口では説明できないんですが謙讓語についての話です。例へば「申上げる」とか「差上げる」とかいふのが謙讓語といふわけですが、謙讓語といふのは話し手が何者かと何者かとの間の上下關係を捉へた場合に使ふ言葉です。つまり下位の物が上位の者に向つて何か物を渡すときには「差上げる」といふ風に、下位の者が上位の者に何か物を云ふならば、それを「申す」と云ふ。さういふものが謙讓語だといふことなんです。謙讓語といふのは、「自分」がどうだの「相手」がどうしたのといふことは一切關係がない。「相手を尊敬する」なんてものぢやない。

ここに實は「みなさんこれが敬語ですよ」といふ本があつて、そこを特に指摘した本なんです、私が書いたものです。これに十分に書きました。読んでいただけると有難く存じます。ここで指摘しておきました間違つた考へ方、とんでもない考へ方が、國語學の世界でもう何十年も常識化されてをりまして、遂に「敬語の指針」にも採用されてしまひました。

これに關する自慢を多少させてもらへば、私は四十年前前に國文法の専門誌で評價されたことがあるのです。當時『月刊文法』といふ雑誌がありまして、その懸賞論文で受賞した論文といふのが「辻村敏樹氏の敬語説への疑問」といふ題の論文でしたけど、その本で特に取上げて言つたのは、發言者はどこに居てもいいんだと。動作の受け手の上に居ても下に居てもいいんだといふことを證明しようとした、そして現實に實例を以て證明できた、さういふ論文だつたんです。それが『月刊文法』で受賞したんです。受賞したといふのはどういふ意味か。その時の審査員は、久松潜一、今泉忠義、松村明——この世界では大變な人たちだといふことは、國語國文關係の人ならご存じだと思ひます。この三人の審査員の方たちが認めてくれたわけです。謙讓語は受け手を尊敬するなどいふものではない、といふ考へ方を認めてくれた。そんならば少しは世間でも學界でも考慮してくれればいいだらうと思ふんですが、全く現代の國語學者の耳には届いてみません。そこで駄目だと指摘した考へ方が「敬語の指針」に出てしまつてをります。

このこと、私の發見か創見であるかのやうな言ひ方をしました、實はちがふんですよ。時枝誠記先生の敬語説にほかなりません。

戦後の國語學は時枝否定一本槍で来てしまつてゐるんですね。

そして妙な權威を持つてしまつたのが昭和二十七年に文部省から出た「これからの敬語」といふ文書です。

あれ以來敬語は完全に混亂しましたね。

占領中ですから色んなことがあつたんですが、その數年前の昭和二十二年に、これは皆さんに紹介しておきたいと思ふんですが、「學習指導要領國語科編」といふのが文部省から出ます。その中で非常に特徴的な言葉があるんですね。「中學校の國語教育は、古典の教育から解放されなければならぬ」。

かういふ非常に印象的な言葉があります。作成者の一人石森延男氏は、これが骨格となつて新しい國語教育の源泉となつた、といふことを誇らかに語つてをります。

その更に前の年には「當用漢字」「現代假名遣ひ」が制定されてをりますし、そのほか様々な國語破壊運動が行はれるわけです。そして敬語破壊の「これからの敬語」があつたわけですが、残念ながら平成十九年二月の「敬語の指針」は正にその總仕上であるといふことになると思ひます。話はちよつと戻りますが、お米の問題。「物類稱呼」(越谷吾山)といふ江戸時代の方言辭書がある。あの中に「米」

といふ項がありまして、面白いことが書いてある。遠江の國天龍の川上では米のことを必ず「菩薩」といふ。米といふ言葉を殆ど使はない、といふのです。それから本居宣長の「玉勝間」を見ますと、米粒などを「佛法」と云つたり、遠江の國では「菩薩」と云つたりする。これは米粒といふものを大切にして疎かにすまじきものだといふ意味で云ふのだからその點では結構かもしれないが、菩薩より尊きものはないと思つてゐるとはとんでもないぢやないか、最も尊いものなのだから「神」と云つたらよからう、といふことを本居宣長は言ふのです。第十四巻に出てをります。實に爽快ですね。それが我々日本人の感覺なのであつて、今の學者は役所と一緒になつてその感覺を根本から無くさうとしてゐる。どういふ人たちなんでせうね、學者といふのは。またどういふ情熱なんでせう。僕は不思議でしやうがない。

今の學者は、例へばご飯を調べてくれるお母さんに手を合せる氣持で「いただきます」と言ふのは間違ひである、といふことを教へるわけですが、ここにまた持つて來てゐる御紹介したいものは、昔の國定教科書です。「ハタ、タコ讀本」といふのがありました。明治四十三年から大正六年まで使はれた小學校の國語の教科書なんです。その中の一年生のところに、かういふ文章がある。

「アカンボノトキニ、ダイテチヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。アタタカイフトコロノ中ヘイレテ、ネンネコウヲウタツテクダサツタノハ、ドナタデスカ。ハシヲモツテ、ゴハンヲタバサセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。(略)」

「ソレハオカアサンデス。オカアサンハワタクシヲカハイガツテクダサイマス。ワタクシモオカアサンヲダイジニシマス。」

かういふ文章です。これを一年生たちは聲をそろへて何度も何度も読み上げて、殆ど暗記してしまつてゐたものでせう。實際の自分の生活語とはもちろん違ひもあつたわけですが、かういふ言葉遣ひが少なくともあるべきだといふ常識が、當時きちんと形成されてゐたんですね。ところが、現在の教科書では先生と親に對する敬語は出て來ません。

皆さん、びつくりなさると思ひますが、現在の教科書には出てこないんです。「先生は黒板に何々といふ字を書きました」と、かういふ言ひ方です。先生に對する敬語は使はれてゐません。書きましたの「まし」は先生に對する敬語ではありません。「先生は黒板に春と書きました」。今の教科書では、先生には敬語を使はないもの、敬語を使はないかういふ文章がいつも規範として、正しい國語の在り方

として與へられてゐるわけです。

もちろん、親にもさうです。家の仕事を子供がちよつと手傳ふ。さうするとお母さんは

「ありがとうとお礼を言いました」。

と言つたことになつてゐる。「お禮」とある。そして「言いました」とある。親の動作に對して敬語が使はれてをりません。昔は「下さつた」「食べさせて下さつたのはどなたですか」といふ表現になつてゐる。今は一切ない。ところが昭和三十五年頃までは、親や先生に對する敬語が國語の教科書の中に出てゐたんです。その後ほとんど無くなくなつて來た。その流れが結實したのが平成十二年の國語審議會の答申「現代社会における敬意表現」となつた。それから、平成十九年の「敬語の指針」となりました。

因にさつきお話ししたお母さんの教材が出てゐるこの教科書「ハタ、タコ讀本」ですが、これにはかういふ文章も出て來ます。六年生用の「兒島高德」です。

元弘二年三月、北條高時、後醍醐天皇を隱岐へ流し奉る。臣下として一天萬乘の君を遠國へ遷し奉ること無道の極みなり。武家の運命も今に盡きなんと、罵りいきどほる聲ちまたに滿つ。

かういふ風に始まりまして、そして兒島高德の櫻の木を削つて書いた

天、勾踐を空しうする莫れ。

時、范蠡無きにもあらず。

の詩句が何の注釋もなく、どんと出てゐる。これは教室で先生が注釋してくれたものなんでせうね。あと、例へば五年生には「齋藤實盛」といふ教材がある。壽永二年篠原の合戦で木曾義仲の部下が不思議な侍を討ち取る。その報告を聞いて木曾義仲が「それは武藏の齋藤別當にはあらずや。

義仲の幼目に見たりし時も、すでに白髪まじりの老人なりき。今七十にも餘れば、殊の外白髪には成りたらんに、髪ひげの黒きは如何に。樋口は古き友なり、見知りたらん。」

さうして髪を洗ふと正に齋藤別當實盛の顔が出て来るわけですね。それを見て義仲が述懐する場面が次のやうに表現されてをります。

「我が父の討たれ給ひし時、義仲二歳なりしを、敵は畠山に命じ、尋ね出して殺さむとせり。畠山は『いかでかかる幼き者に刀を立てん。』とて、ひそかに我を此の齋藤別當のもとに預け、別當は七日の間手もとに置いて、木曾へつかはしたり。されば實盛は義仲の爲には七箇日の養父。あやふき敵の手より救ひくれたる厚恩、いかで

か忘るべき。」とさめざめと泣きたれば、一座皆よろひの袖をしぼらざるはなかりき。

これが小學校五年生です。

かうした、國語、言葉の中で育つてゐたんですね、われ

われの先輩は。どうもうらやましいと言ふしかありません。

いや、話がまとまりませんで失禮いたしました。

(はぎのさだき・元産能大學教授・本會常任理事)

赤口

近代化及び現代に於ける歴史的假名遣の意義

南 敏雄

私は予備校で國語古典を教へてゐるが、元は日本思想史さらに文化史を習つた者、この會にも昨年入れていただいた者なので、専門家には既知の事実を事新しく述べてゐる所があるかもしれないが、それは素人ゆゑのことと、寛恕をたまはりたい。また、本稿では促音便「つ」は便宜上、小字「つ」を用ゐてをり、さらに、いはゆる字音假名遣ひに關しては現在思索中ゆゑ、論外のことと了解されたい。

Ⅰ 國民國家形成のための

統一表記基準としての歴史的假名遣ひ

明治の初めに學制發布があり、全國の國民が文字を誤りなく讀み書きできるやうにするための學校教育が始まつたとき、まづ大きな課題となつたものが平假名の表記法である。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』は、江戸時代の文政五年までの二十一年間、何度も出版され、広く讀まれた本だが、たとへば動詞「居る」を、「おもつてゐる」と書きな

がら、「まけてゐるもんか」とも書いてゐる。(岩波文庫。上巻36ページと184ページ。以下同卷) また、104ページでは、「はいつてみた」と書いてゐるのに、一枚めくつて106ページでは、「はいつてゐる時」と書いてゐる。さらに、形容詞では、「美しむ若いかみさまを」(37)といふ表記もある。おそらく十返舎一九は、「讀んで意味が分かれば、それで良い」ぐらゐの考へだつたのだ。だから、「腰がいたみませう。……こつちからあげませふ。……馬でも雇てあげましやうか。」と、三種類の「シヨウ」が同じ172ページに平氣で陳列してある。十返舎一九の平假名表記法は「氣分次第」といふところであらう。

しかし、このやうな氣分次第の平假名表記法を學校教員が認めて、「いつぱいやらかさふ」(199)でも、「もう二合やらかさふ」(223)でも、どちらでも良い、「さ」でも「そ」でも、こだはることは無い、と言つた瞬間、いたづら坊主が、「江戸っ子だ。そば食ふ時は、わさびを付けて、さつ

と食へ」を、「江戸っ子だ。さば食ふ時は、わさびを付けて、そつと食へ」と書いても、是正できなくなる。

國民全体が誤解のないやうに読み、かつ書くことができやうになるための統一基準である歴史的假名遣ひが作成され、時に強制されたのは、ほぼ歴史的必然であつた。

2 再セットアップあるいはリセット時の

バックアップとしての歴史的假名遣ひ

パソコンに悪質なウィルスが入つて、パソコンが誤作動し始めた時は、パソコンを再セットアップあるいはリセットして、初期化する以外ない。その時のバックアップ機能を果たす物が歴史的假名遣ひである。なぜならば、歴史的假名遣ひは、わかる限りの過去から現代に至るまでの「語」(意味・用法・音などの統體としての「語」)の歴史的・一貫性および合理性を重視して作られた平假名表記法だからである。

現代假名遣ひに、このバックアップ機能はない。普通、現代假名遣ひは、「現代語の音韻に従つて書き表すことを原則とする……」などと説明されて、「現代音韻」が既に確定された物のやうに言はれてゐるが、その實、流動變轉して止まないものであり、例へば、「言う」とは言はない、「ゆう」と言ふのだ、いや、「ゆー」と言ふのだとの、世論

調査回答が多数を占めれば、内閣や文部科学省は、「新年度からは、動詞『言う』は、『いう』と書かずに『ゆう』と書く。なお、最近の調査により、『ゆー』の論者も増えてゐることを考慮して、『ゆう』も例外として認める」といふ通達を出さなければならなくなるだらう。

現代假名遣ひには、過去と現在とを未來に傳へ統べるといふ思想が脱落してゐる。單なる樂チン合理主義である。

これは現代假名遣ひの致命的缺陷であつて、バックアップにならない由縁である。だから、現代假名遣ひの本來の論理によつては、今の若者が、「先生、この答わ正しいのですか?」と、eメールで書いてきても、合理的訂正のしやうがない。この文は、本當に私の生徒が、それもかなり上位のクラスの生徒が送信して來た文である。

3 眞の個性を確保する根據としての歴史的假名遣ひ

獨斷を言ふやうだが、現代日本の社會、特に若者に個性はない。おそらく今最もチャホヤされてゐる女子高生たちは、ルーズソックスが流行すると、全國一齊にシワシワダボダボを履き、安室奈美江が賣れると一齊にアムラーに變身し、なぜか理由がわからないが浜崎あゆみのCDが賣れると、突然、浜崎ルックスの長まつ毛である。私は五十の坂

を越えて馬齢を重ねに重ねてしまったが、昔、高校生だったころには、「個性尊重！生徒にもつと自由を！」といふ、ありがたいが迷惑な叫び聲を何度も聞かされた。その結果、生徒にもつと自由を與へた現在、生徒の個性がなくなったのである。

もともと個性といふものは、典型・フォームがあつて初めて可能なのだが、現代日本のあらゆる側面から中心と典型がなくなりつつあるのだから、今の若者は、自由のために反抗することさへできなくなつてゐるのである。せめて若者が反抗できるやうにするために、中學校・高校で、「歴史的假名遣ひが正統性・合理性を持つ平假名表記法である」と斷言し、また、現代假名遣ひとの相違點などを教へるべきである。またさらに、「一般社會においても、本來は、歴史的假名遣ひが使はれてゐる社會の方が、より高級で健全な社會なのだ」と、斷言すべきだと思ふ。私は、僭越・生意氣だが、學校・一般人の教材用に『旧かな変換ゲーム』といふブログを張り出させていただいてゐる。

URL (住所) は、

http://373.at.webry.info/200602/article_40.html

これが参考になれば、幸である。

しかし、學校で歴史的假名遣ひを教へ、かりに強制した

ところで、A新聞社やI書店は、現代假名遣ひを捨てないだらう。日本ペンクラブは、「言論表記の自由を奪う暴挙だ」と、反對聲明を出すだらう。だが、私が予備校で教へてゐる感觸では、今の若者でも合理的に過去と現代を繋ぐ説明をすると、素直に受け入れるものだ。「昔、^いゐ^はは^い」^wと發音したから、「^い」とは別の文字になつてゐる。「^ゐ」も^wと發音したから、「^え」とは別の文字になつてゐる。どちらもワ行で、「^a・ⁱ」^wになつてゐるのは、合理的だ」といふ説明を始めると、必ず生徒たちは頭を上げるものである。あるいは、表記法とは直接關係がないが、日本の皇室が、なぜ他國の王室と異なつて千年以上も斷絶せずに、しかも城でもない御所に存在することができたのか、といふ難しい話を合理的に説明すると、生徒は氣持が悪いぐらゐ聞き入つてゐる。過去と現在とを合理的に繋ぐ説明には、今の若者も謙虚に耳を傾けるものなのだ。だから、學校で歴史的假名遣ひの論理や使用法を教へるべきである。それによつて、若者たちが、やうやく反抗する相手を見つけることができるのだ。それが歴史的假名遣ひであるのか、日本ペンクラブの聲明であるのか、しかと見届けたいと思つてゐる。(みなみとしを・豫備校古文科講師)

青少年のための假名づかひ問答

山本直人

何故「歴史的假名づかひ」なのか

生徒 先生。前からちよつと疑問に思つていたことがあるんですけど…。

教師 なんだい？突然…。

生徒 先生はどうして文章を書かれるとき、昔の假名づかひをお使いになるんですか？「思う」を「思ふ」だとか、何だか讀みにくくてしかたないですよ。

教師 何を質問するかと思つたら、こんなことかね。この間君は「どうして文法なんか勉強しなくちやいけないんですか？」なんていふ質問をしたね。あの時先生が何て答へたか覚えてゐるか？

生徒 えつと…。例えば社會で正しく生きていくためには、法律や道徳を學ばなくてはならない。それと同じように、文法は言葉を正しく理解し、用いるための法律なんだ…。確かこんなことを仰つていましたよね…。

教師 その通り！よく覚えてゐたね。例へば今、あちこちで現憲法の改正が論議されてゐるけど、本來憲法といふのは將來の日本にも通用できるやう、充分な検討を重ねた上で起草されなければならない。實は文字表記はそれよりもつと大切に、法律の様に目の前の現實的な要請だけ、といふわけにはいかない。過去から未來の人にも意思疎通が可能になるやう、できうるかぎり秩序立つてゐる方がいいわけだ。さういふ點からいふと、戦後制定された「現代かなづかい」なんていふのは、正統な表記法としては不適切だね。

生徒 エゝ？今の表記法が不適切なんて！先生の使つてる「歴史的假名遣い」なんていつたら、「でしよう」を「でせう」だとか、全然發音通りじゃないし、なんだか難しそうですよ。

教師 いやいや、歴史的假名遣ひは決して難しいものではない。昔は小學生でも何の抵抗なしに覺えたんだ。分量

的には一週間。…いや、教へ方次第では数時間でも充分習得できる。

生徒 数時間ですつて? 「チョウチョウ」を「テフテフ」、「カイチョウ」を「クワイテウ」だとか、それこそ一週間かけても無理ですよ。

教師 「テフテフ」、「クワイテウ」などは漢字で「蝶々」、「怪鳥」と書いてしまへば覚える必要はない。これらは「字音假名遣ひ」といつて、元々は音讀みで中國語の發音だから、漢字を使へば濟むことなんだ。問題はそれ以外の、本來のやまことばから成る「國語假名遣ひ」。けれどもこれも基本的には授業の古典文法の知識があれば充分だし、今使はれてゐる「現代かなづかい」と實はほとんど變らない。「歴史的假名遣ひ」が難しいなんて眞赤な嘘だ。

「表音式」の陥穽

生徒 でも假にすぐに習得できたとしても、實際の發音と違つてゐるのはやっぱり抵抗あるな…。

教師 君は「發音通り」に拘つてゐるやうだけど、例へば君、英語の表記はどうなるのかね。

生徒 それだつていちいちスペリングを覚えなくちゃいけない。中學校のときから試験前になると、「ナンバー」(number)を「ヌンベル」とか唱えて丸暗記したけど、面倒なんだよね、正直いつて…。これだつて、できれば表音式に改めてほしいですよ。

教師 ぢやあ、例へば「is」と發音する單語だけれども、中學レベルのものだけでも、「see」「sea」と少なくなるとも二つは出てくる。この區別はどうする?

生徒 う〜ん。例えば「she sees sea」は、「shi: siz si:」か…。これじゃあ何を言つてゐるのか、さっぱりわからないや。教師 實は文字といふものは發音だけでなく、どうしても「目で訴へる」要素が不可欠なんだ。例へば國語改革以降、「どうしよう」と「どうしやうもない」の區別がはつきりしなくなつた。他にも「くらい(暗)」と「くらゐ(位)」「こゑ(聲)」と「こえ(越)」など、ただでさへ日本語は同音異語が多いところに、漢字制限まで加はつてしまつたものだから、新表記になつて識別が紛らはしくなつた言葉は少なくない。

生徒 今はパソコンで何でも變換できちゃうから、別に不都合はないと思えますけど。

教師 實は「現代かなづかい」の中にも、歴史的假名遣ひ

の要素が一部残つてゐて、すでに君たちも使用してゐる。生徒 さて？そんな覚え全くないですけど。

教師 よく想ひ出してごらん。ほら、助詞の「は」「へ」「を」がさうだ。表音式といふのなら、どうしてそれらも「わ」「え」「お」に改めないのかね。

生徒 確かに小さい頃繪本を聲に出して讀んだとき、どうして「は」「へ」「を」だけ發音通りじゃないんだろう、つて疑問にもつた記憶があります。これもいつそのこと、

「わ」「え」「お」に直してしまえばいいのに。

教師 では、試しに例文を書いてみよう。

「わたしは美術教室ええおほえにゆく」

生徒 「ええおほえにゆく」？何のことだかサツパリわからなかつた。

教師 これも従來通り、「わたしは美術教室へゑをおほえにゆく」とでも書いた方がよほどすつきりする。假名づかひを表音式に改めたままではまだしも、實は文字には「目で訴へる」といふ要素もあるので、重大な盲點を見落としてしまつた。「表音かなづかい」を名目にしながらも、結局は假名づかひの「表意性」を無視するわけにはいかなかつたわけだ。

生徒 う〜ん……。でも助詞ぐらひは大目に見ていいんじゃないか。

青少年のための假名づかひ問答

ないかしらん。

教師 いや、それだけではない。「現代かなづかい」により、語源もわからなくなつてしまつた。

生徒 語源なんて知らなくたつて……。そんなものは一部の日本語オタクに任せておけばいいじゃないの？

教師 試しにテストしてみようか。次の讀みがなを書いてごらん。

(1) 地面 (2) 世界中

生徒 今さらそんなの。小學生じゃあるまいし。(1)の

「地」は「地球」(ちきゅう)の「ち」だから、「ぢめん」。

(2)は「中心」(ちゅうしん)の「ちゅう」だから、

「せかいちゅう」でしょう？樂勝、樂勝。

教師 残念ながら「現代かなづかい」では二つとも×をつけないやならない。正解は、(1)は「じめん」、(2)は

「せかいじゅう」。

生徒 え〜？そんなのありかよ〜。

教師 ハハハ(笑)。どうやら「現代かなづかい」は君みたいな優秀な生徒ほど間違ひやすいやうにできてるみたいだね。

生徒 だつて、確か「湯飲み茶碗」だつたら、「ゆのみぢゃわん」つて教わつた記憶が……。

教師 これも實にいい加減だ。「現代かなづかい」では、「ぢ・じ」「づ・ず」の四つ假名の區別が實に適當に書き分けられてゐるんだ。「手綱」は「つな」の語源があるから

「たづな」と規定する一方、「きづな」（生綱）の場合は、どういふわけか「きずな」と書かなくてはならない。他にも「いなづま」（稻妻）が「いなずま」となつたり、「ひざまづく」も「ひざまずく」と書かなきゃ誤りとなつてしまふ。

生徒 これじゃあ、いちいち丸暗記しなくちゃいけないよ。
教師 さうだね。一見すると「歴史的假名遣ひ」の方が難しく思へるけれど、細かく見ていくと、或る意味で「現代かなづかい」の方がよっぽど難しいのではないか、と思ふところが少なくない。文字を表記する上で、語源を無視してはいけないといふことは、かうした例からも理解できると思ふ。

生徒 「ぢ・じ」「づ・ず」の問題はこちらも納得できないけど、かといつて「舊かな」は不合理な面が多いし、とても使用する氣になれないよ。

日本語の秩序と文法體系

教師 「歴史的假名遣ひ」が本當に不合理かどうか、今度は文法で確認してみよう。

生徒 えつ！文法の話なんか聞きたくないですよ。
教師 まあ、決して難しくはないから、一寸我慢して聞いてほしい。例へば古典文法で、「思ふ」の活用はどうなる？

生徒 八行四段だから、確か…。

思ふ一は・ひ・ふ・ふ・へ・へ

教師 でも今の假名づかひだと、

思ふ一わ（お）・い・う・う・え・え

…なんていふ「ワア行五段活用」などといった、五十音圖にもないやうな、日本語の體系を破壊した活用になつてしまつてゐる。それなら「八行」のままの方が、よほど一貫してゐるし、文法的にも秩序立つてゐる。

生徒 けれども、現に僕らは「思フない」つて發音しているし、實際の會話よりも文法が優先されるなんて本末顛倒ですよ。

教師 さて、本當に我々は「思フない」なんて、「ワ」の音で發音してゐるのかな？「ワ」といふ音韻はかなり發音が強いはずだ。正確には、「ワ」と「ハ」の中間音といふべきではないかな。もし「ワア行」といふのであれ

ば、「思フない」ともつと強く發音すべきではないかな？
古文の時間でも假名づかひを讀ませるとき、「語中語尾のハ行はワ行になる」つて教へるけれど、實際は依然としてハ行に近い。

生徒 そういわれてみると「私は」の「は」にしても、ハ行でもワ行でもない、何だか不思議な發音のような気がする。

教師 國語學的な豫想でも、將來的には「思ふ」の活用は、「オモアナイ／オモイマス／オモ／オモートキ／オメーバ／オメー」のやうになるといはれてゐる。

生徒 あ、何だか今でもその發音に近くなつてますね。「オモアナイ」つて言つても、もしかすると「思わない」より近い音かもしれない。

教師 でも、たとへさうなつても、新たにまた強制的な國語改革でも始めないかぎり、文字表記といふものは變らないと思ふ。突然「思はない」から「オモアナイ」に發音が轉化したわけではないからね。假にさう變化したとしても、「オメーバ」などは語幹がなくなつて、文法的に説明できなくなつてしまふ。實は現代口語文自體、實際の今の會話體から離れてしまつて、一種の文語文化化してしまつてゐるところがある。それならいつそのこと、

初めから「思ふ」で通しておけば、五十音の體系も整つてゐるし、將來的な變化にも充分對應できる。

生徒 會話での發音と文字表記とに差があることは理解したけれど、何もそこまで文法を優先しなくても…。

教師 では「現代かなづかい」だと、どうして「言ふ」を「ユウ」と書かないのかな。

生徒 そういえば、實際は「ユウ」と發音してゐるのに、表記は「イウ」です。別に「ユウ」でも構わないじゃないですか。

教師 では「ユウ」の活用はどうなるだらう。

ゆうーいわ・いい・ゆう・ゆう・いえ・いえ

こんな風に語幹が、活用の途中から「イ」から「ユ」へと變化してしまふ。「思う」の場合は「ワア行五段活用」と苦しい辨明をしてきたけれど、語幹まで變化してしまつたら、文法的な説明すら全くできなくなつてしまふ。そこで慌てて「イウ」に改めたさうだ。第一「ゆう」だと、「結ぶ」(ユウ)との區別もできなくなつてしまふ。文法なんて學校の國語の授業でしか使はないし、生活する分には何らも支障もないと思はれがちだけど、そもそも識字教育といふのは大部分が教室で實施されてゐる。そんなわけで、會話音を優先したはずの「現代かなづか

い」すら、説明のためには文法に頼らざるをえなかつたわけだ。

國語の連続性について

生徒 何だか頭が混亂してきたぞ。

教師 先程述べたやうに、文法といふものは言葉を正しく理解するための法則だから、できうる限り秩序正しい方がいい。法律が過去から未來にも通用するやう、充分に検討しなければならぬやうに、文字の表記も可能な限り一貫させた方が望ましい。その意味でも何よりも「現代かなづかい」は、過去の文章との連絡を斷絶させてしまつたところに、最大の難點がある。

生徒 そんなこと言つても、言葉は變るものだし、時代の變化に即した表記が必要なんじゃないすか？

教師 君の言ふ通り、確かに言葉は變る。けれども如何にこれだけ若者言葉が蔓延してゐるとはいへ、日本語といふものはこれまで基本的には大きな變化はないのだし、人工的に變へるものでもない。歴史的假名遣ひは、これまで言葉が變化してきたにも拘らず、日本語の表記法としては千年以上の長い期間にわたつて用ゐられてきたん

だ。それを戦後になつて突然表記を改革してしまつたのだから、これまでの長い「正書法」の傳統を破壊してしまつたことになる。

生徒 けれども、すでに戦後六十年ですよ。これだけの年月がすぎれば、「現代かなづかい」だつて國民の中でも充分定着してると思ふんですけど。

教師 確かに今から六十年前の表記に戻れ、といつても相當厳しいものがあるだらう。けれども、英語にしてもフランス語にしても、便利だからといつて文字の綴りを改革することなどなかつた。中國の様に、膨大な漢字の教育の支障から簡體字を普及させた改革もあるが、これも結果的には過去の文獻との連續性を斷つてしまつた。今の若い中國人は、『論語』や『三國志』の原典もすつかり外國語と化してしまつた。

生徒 確かに僕らからみても、古文漢文は全くの外國語ですけどね（苦笑）。

教師 實は日本語を改革しようといふ動きは、遡ればすでに江戸時代からも一部あつた。けれどもそれが頭在化するのには、恐らく明治維新以降だらう。「黒船來航」に衝撃を覺えた一部の日本人が、「これから漢字や假名づかひをいちいち覺えてゐては西洋文明に追いつかない。日

本語はローマ字に改めるべきだ」といふ運動を起した。そのほか純粹國粹主義の立場から日本語のカナモジ化、假名遣ひを表音式に改めようといふ動きも始まつたが、これもいづれ森鷗外はじめ、良識ある人たちの阻止によつて何とか切り抜けた。

生徒 そういえば古文も假名字だらけだけど、どこで區切つていいかわからなくてどうも苦手だなあ。電報の文字だつて読みにくいのに……。ましてローマ字化なんていつたら、かえつて読みにくくて仕方ないや。この間現代文の授業で石川啄木の『ローマ字日記』というのを讀まされたけど、なかなか進まなくてイライラしました。かといつて漢文みたいに、漢字ばかり並んでも困るし……。

教師 さういふ意味でも、日本語の漢字假名交じり文つていふのは、覺えるまでには色々面倒な點があるかもしれないけれど、文字の視覺性といふ點においては大變優れた文化だといへる。ところが第二次大戦で日本が敗北すると、再び自國の文化に劣等感を抱くやうになつた。「日本人は漢字や假名遣ひの習得に膨大な時間を費やしたから、戦争に負けた」といふ具合にね。今度は占領下の中、「日本語を英語に改めるべきだ」といふ動きが日本人自らの中から起こりはじめた。そこでアメリカの

占領軍も政府に「日本語のローマ字化」といふ壓力をかけ、それ以前から活動してきた「ローマ字會」や「カナモジ會」の會員たちが、それに便乗したわけだ。

生徒 え！もしかして日本語が英語かローマ字に變つた可能性もあつたわけですか？

教師 ハワイやフィリピンやシンガポールなど、嘗ての植民地政策を考へればそれは充分ありうることだ。幸ひ國語の英語化、ローマ字化、さらにはカナモジ化といふのも何とか避けることができた。さすがに突然變化させると、反撥がくるのを考慮したわけだ。そこでせめて漢字を少なくし、假名遣ひだけでも表音式に改めようといふ案に切り替へられた。これが現在の「當用漢字表」と「現代かなづかい」なわけだ。

生徒 そのおかげで僕らは随分樂になりましたけどね(笑)……。

教師 さて、それはどうだらう？戦後の國語改革のもう一つの理由に、「これからは國語に時間をかけてはダメだ。その時間を英語や數學に回すべきだ」といふ考へもあつた。皮肉なことにその後、戦後復興期から高度成長期にかけて、受験戦争が過剰に激化することになる。

生徒 それは「ゆとり教育」の結果、かえつて僕らの間で

塾通いが増えたのとよく似てますね。

教師 今の「日本語ブーム」も然りだ。若者の言葉が亂れてゐるなんて、すでにもう何年も前からいわれてきたことだけど、かうした危機感が今になつて漸く目覺めたものとも考へられる。

生徒 讀みましたよ、『聲に出して讀みたい日本語』。體育や音楽みたいにとつつきやすく、國語も悪くないかなつて思いましたけど。

教師 今の憲法改正論議や教育基本法の改正も、現在の國際情勢の急變や、「いぢめ問題」にも象徴されるやうに、教育の荒廢に對しての危機意識のあらはれともいへる。

生徒 ただ、日本語の亂れの原因が、それらと同様、戦後の國語改革に行き着くものなのかしらん？

教師 直接の原因を探りはじめたら何とでもいへさうだけど、自國語の教育がかくも輕視された發端であることは間違ひない。

生徒 かといつて、假名表記が元のままに戻すとなつたら、これはこれで反撥がありそうですけど。

教師 これが「上からの政策」の厳しいところだ。けれども、少なくとも周りの人たちがみんな「現代かなづかい」を使つてゐるからといつて、それだけが唯一絶対正しい

なんて思はないこと。それはかつての全體主義國家同様、非常に危険なことなんだ。何も君たちに無理に表記法を改めよといひたいわけではない。ただ、少なくともこの機會に、もつと日本語の歴史といふものに關心をもつてもらひたいね。

(完)

※本稿執筆にあたり、時枝誠記著『國語問題と國語教育』(中等學校教科書株式會社)はじめ、福田恆存著『私の國語教室』(中公文庫)、林武著『國語の建設』(講談社)、丸谷才一編著『國語改革を批判する』(中公文庫)、土屋道雄著『國語問題論争史』(玉川大學出版部)等を参照させていただきました。

(やまもとなほと・『味爽』編輯人、昭和四十八年埼玉生まれ)

(本誌編輯事務局)同人誌『味爽』より轉載許可を得てここに掲載しました。

言葉の雑學（九）

鹽原經央

〔たふれる〕倒レルの歴史的假名遣ひはタフル。他動詞の倒スもタフスだつた。『小学館古語大辞典』の「たふる」の項に「中古末には、タウルと發音された」と小池清治氏の語誌あり。音韻變化の通説に背きトウルにならなかつたのは通ルとの衝突回避とは小池氏の説。

〔たべよう〕下一段動詞に文語の推量・意志の助動詞ムに相當するヨウが付くときも、上一段動詞と同じで、現代・歴史的假名遣ひ共通でヨウと書く。「象の食べヨウはさまざまいい」などのヨウはムに置き換へられな
い。これは「様」に相當するので「食べやう」と書く。
〔たわむ〕「撓む」の歴史的假名遣ひは「たわむ」。「加えられる力に耐えながら、しなやかに曲がる意」（『岩波古語辞典』）だ。そのしなやかぶりをいふ「たわやか」

はタオヤカともなるが、ワ行の母音交代なので「たをやか」。タラヤメはさういふ様子の女性の意。

〔たをやか〕柳の枝がしなふやうに身のこなしが優美な女性の美しさをいふ。タワム（撓）のタワの母音交替形なのでタラヤカ。そのやうな女性をいふタオヤメも同じ理屈からタラヤメと書く。さういふ日本の女性美を否定するジェンダーフリーにはとてもくみし得ない。

〔ちか〕直を直談判、直火のやうにチカと讀むのはヂキから轉じたもので、ヂキは直の吳音の字音假名遣ひ。語頭のヂであるが、もともとの和語でない。幼児語のジジ（爺）も歴史的假名遣ひはヂヂだが、オホヂ（祖父）の略だ。ヂヂムサイは派生で後世できた語。

「ちやうど」丁度と書かれる。『岩波古語辞典』によると「擬音語チャウに助詞トの添った形」。始めは物の音を立てるさまを映した語だったが、後に「過不足なく、さながら」の語義が擴張したもののやうだ。歴史的假名遣ひは字音を映した漢字の丁によつてチャウド。

「つくえ」「机」はかつては「突き据ゑ」の約とされ、歴史的假名遣ひは「つくゑ」としたこともあつたが、今は平安初期の資料の發見により「つくえ」が正しいとされてゐる。ヤ行のエだ。『小学館古語大辞典』の「つくえ」の語誌に、「突き枝」からの變化説が載る。

「づだぶくろ」頭陀袋と書く。頭陀は梵語の音譯で、衣食住の欲望をはらひのける修行の意（『日本国語大辞典』で、僧の首にかける袋を言つた。轉じて、だぶだぶした何でも入るやうな袋の意に使ふ。頭の字音はツ。歴史的假名遣ひでは頭痛はツツウ、頭巾はツキンに。

「づぶとい」「圖太い」と書かれる。圖も現代假名遣ひで

はもともとズと濁つた字音なのでズと書くときれるが、ツでなければ漢音のトとのつながりが見えなくなる。圖太いは圖の字音から來た語かは不明だが、歴史的假名遣ひは「づぶとい」。圖々しいもツウツウシイ。

「てうづ」手を洗ふ所、その水、轉じてトイレの意にも用ゐた「ちようず」はもはや死語？漢字で「手水」と書くことから推理できようが「てみづ」（水の歴史的假名遣ひは「みづ」）のウ音便である。だから「てうづ」。ちようずでは言葉のなりたちが分からない。

「てうな」「鉞」または「手斧」「手鉋」などと書かれる。大工さんが使ふ道具だが、現代假名遣ひだと「ちような」。テオノ（手斧）↓テウノ↓テウナと變化した語形で、歴史的假名遣ひでは「てうな」になる。テウウナのやうな書き方では、言葉のなりたちが解し得ない。

「でせう」「いいでしょう」の「でしよう」は推量の助動詞。丁寧な斷定の助動詞「です」の未然形に推量・意志の助動詞「う」が付いた語形。このウは文語のムの

末裔(まつえい)なので、歴史的假名遣ひは「でせう」になる。同じやうに「ましよう」も「ませう」に。

「でづつぱり」現代假名遣ひはデズツパリが本則だが、『日本国語大辞典』はさすがにこんな愚かな假名遣ひは認めない。「でずつぱり」はカラ見出しにしてゐる。出突つ張りなのだから、當然デツツパリだ。デズツパリでは、^ズつと出ないでゐる。意になつてしまはう。

「てふてふ」チヨウチヨウ(蝶々)は字音假名遣ひでは「てふてふ」。「てふてふ」が一匹韃靼海峡を渡つて行つた」といふ安西冬衛の「春」といふ詩がある。蝶のひらひらと舞ふイメージは「ちようちよう」では得られない。歴史的假名遣ひの不思議な魅力の一つである。

「どう」「お茶でもどうです」のドウはコソアドの不定稱のドの音が延びたものか、歴史的假名遣ひでもドウとウを用ゐて書く。ドウソ・ドウデモ・ドウシテモ・ドウスレバ・ドウナツテモ・ドウイフ・ドウカ・ドウモ……など、みな同じ。ドはイツレの母音交替形か。

「どうに」「そのことなら、とうにけりがついてゐるよ」のやうに^ズつと前に^ズの意に用ゐる。副詞「疾(と)くに」のウ音便。歴史的假名遣ひでも「う」である。文語の形容詞に「疾し」といふのがあつた。「思へばいと疾しこの年月」のそれだ。^ズ進むのが速い^ズ意。

「ときはづ」現代假名遣ひでは淨瑠璃の常磐津はトキワズが本則といふ。津をズと讀むのは音なのか訓なのか。津が濁ればツになるほかがあらうはずもない。何ともむちやくちやな假名遣ひと言はざるを得ぬ。こんな假名遣ひを強ひた人々は、國語の敵と言はねばならぬ。

「どぢやう」淺草に行くと「どぜう」の看板を見かける。福田恆存はドヂヨウ。語源不詳で假名遣ひが定まらぬが、『現代国語例解辞典』に「ぢ・じ」「ぢやう・ちやう」に發音の別があつた室町期の文獻に『どぢやう』『土長』の表記が見られる。由。さればドヂヤウか。

「どぢる」とじる(閉・綴)、恥じる、ねじる、よじる(攀・振)等ザ行上一段動詞は文語ではダ行上二段活用で、

「とち・ズ、とち・タリ、とづ、とづる・トキ、とづれ・バ、とぢよ」のやうに活用した。だから、歴史的假名遣ひはトヂル・ハヂル・ネヂル・ヨヂルとなる。

「とを」「十」はトヲ。『岩波古語辞典』は朝鮮語の例を挙げ、指を撓（とを）めて數を數へるので「それを數の名とする例が多い」として、十は「撓めきる意か」とする。が、『字訓』は國語の數詞には民族的な特徴があり、「固有の計算法をもつもの」と推測してゐる。

「なかうど」「なかびと（仲人）」のウ音便。「かりびと（狩人）↓かりうど」は同工。「び」の濁音が末尾の「ど」に反映してゐる。「くろひと↓くろうと」「しろひと↓しろうと」は「ひと」が濁らないので、末尾が濁らない「と」に。歴史的假名遣ひはすべて「う」。

「なかんづく」中でもとりわけの意に漢文訓讀で「就中」を讀んだ語形。「なかにつく」の撥（はつ）音便によつて濁音化したのだから、現代假名遣ひが本則とするナカンズクでは意味をなさない。連濁・連呼の原

則に戻すべきであらう。歴史的假名遣ひはナカンヅク。

「なづな」漢字では「薺」。春の七草の一つで、七草がゆに用ゐるが、別名ペンペン草と聞くと何だか食欲が減退しさう。物の名は言ひやうによつて印象が變はるのだ。『大言海』に「撫菜（ナデナ）ノ義ニテ、愛（メ）ヅル意カト云フ」とあり歴史的假名遣ひはヅ。

「なまづ」歴史的假名遣ひはナマヅ。ナマはナメラカ（滑）の意とする語源説が多いが、ヅが何であるかもう一つ不分明。ナマ・ヅ・ウラすなはち「滑らかなる魚」の下略なら納得が行くが、そのやうな用例はどうやらなさうだ。かういふ語はナマヅと覺えるほかない。

聖書に於る國語問題（その七）

「アブラハム イサクを生み」

松岡隆範

新約聖書の初めの書であるマタイ傳福音書はイエス・

キリストの系圖から始る。

明治元譯では

「アブラハムの裔なるダビデの裔イエスキリストの系圖。

アブラハム イサクを生イサク ヤコブを生ヤコブ ユ

ダとその兄弟を生り」とあつて、以下「何某は何某を生み」

といふ形で一ペエジ半に及ぶ系圖を眞直に下つて行くので

ある。

此處で衣部七劃の裔といふ字を使ひ裔と訓ませてゐるが

此の字はスエ、アトツギといふ意味であり末裔の裔である。

衣の部首であるのは本來衣の意だからである。

此處でブリッジマン、カルバアトソンによる漢譯聖書を

参照してみよう。

「亞伯拉罕之裔大關之裔耶蘇基督族譜。亞伯拉罕生以撒

以撒生雅各 雅各生猶大及其諸兄弟。」

となつてゐるのでヘボンが裔の字を漢譯から採入れてゐる

ことが判る。

ヘボンは聖書の和譯に當つて漢譯聖書と欽定英譯聖書と

を大いに參考してゐる。

「生み」も漢譯聖書でも、現代中國語譯聖書でも「生」の

字を専ら使つてゐる。

漢文では外國の人名も地名も漢字の音だけを借りた宛字

を用ゐる。そのまゝでは地の文との區別がつかないので人

名には一本の傍線、地名には二本の傍線を引いて區別する。

此のやりかたをヘボンは便利な方法とみてそのまゝ和譯

に採入れてゐる。日本語では外國の人名地名は片假名書き

すれば良いのであるから傍線を必ずしも必要とはしないが、

人名と地名との區別には便利である。更に中國では書名、

例へば「説文解字」とか「イザヤ書」とかには波傍線を引

いて區別する方法がある。此の一本傍線、二本傍線、波傍

線は今日でも中國の書籍、特に辭書等でよく行はれてゐる。

漢譯聖書、和譯聖書に於ては語の右側に、現代中國の辭書

では語の左側に引かれることが多い。漢譯聖書、和譯聖書に於ては波傍線は全く用ゐられてゐない。波傍線はかなり新しいやり方なのであらう。

此の一本二本の傍線は森鷗外も「即興詩人」の翻譯に於て採用してゐる。

系圖の處、大正六年の大正改譯では

「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系圖。
アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダとその兄弟らとを生み、……」と續く。

裔を子と變へ、讀點を入れて判りやすくした他は大體同じで、上から下へ眞直に降つて行く。

さて、千六百十一年の欽定英譯ではどうなつてゐるかを見よう。

The book of the generation of Jesus Christ, the son of David, the son of Abraham.

Abraham begat Isaac; and Isaac begat Jacob; and Jacob begat Judas and his brethren;

となつてゐて begat といふ動詞を使つて上から下へ眞直に降りて行く。

begat は(父親が子を)生む、procreate, produce といふ意味の言葉である。(女が子を産む場合には bear を用

ゐるのである。) Begat の過去、過去分詞形は begot であるが、欽定英譯では十六世紀十七世紀の古い形 begotten を使つてゐる。つまり begat は父系制で系圖を述べる時に用ゐる語であつて、便利な言葉である。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、儒教の世界は絶對的な父系制の社會であつて男性原理の世界である。従つて父系で述べる時には begat を使ひ、女が子を産む時には bear を使ふのは便利な使分けである。

Begat を使へば系圖を上から下へ眞直に讀み下して行く事が出来る。

中國語でも「生」は父系で普通に使へる語であつて、次の様な文章もその一例である。

「右軍(王羲之)は癸亥に生れしは、當に西晉惠帝の太安二年なるべし。甲辰に至つて大令(王獻之)を生め、是、東晉の康帝の建元二年と爲す。穆帝の永和九年に至つて、大令年十歳。蘭亭に會するも尙ほ詩を成す能はざりき。」

(包世臣「書譜辨誤」)

さて戦後、昭和二十九年に、日本聖書協會から「口語譯新約聖書」が出版された。此の中でマタイ傳冒頭の系圖は次の様な奇怪な文章になつてしまつた。

「アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父……」といふ風に「何某^{エミカク}は何某の父^{エミカク}」を延々と繰返して行きつ戻りつするのである。上から下へ眞直に降つて行かない。實に甚だしい悪文である。

日本聖書協會の戦後の聖書翻譯は千九百四十六年にアメリカで發刊された「改訂標準譯」[Revised Standard Version (R.S.V.)]にすべて忠實に従つてゐるといふ事は、今日では良く知られてゐる。

そこで R.S.V.を調べてみよう。

Abraham was the father of Isaac, and Isaac the father of Jacob, and Jacob the father of Juda and his brothers,……と “the father of” を延々と三十九回も繰返して行きつ戻りつしてゐる。

R.S.V.は従來の *beget* を使つた直截簡明な述べ方を捨て、敢て廻りくどくて判りにくい形にしたのである。

何故此れほどの改悪がなされたのか。私は初めは、此れはコイネエ・ギリシヤ語の原典に忠實な逐語譯をした結果ではないかと考へた。

然し事實はさうではなかつた。原典には「父」といふ語もなく、行きつ戻りつ的述べ方もしてゐないといふのである。

る。欽定英譯の様な直截明快な文章の方が原典に忠實なのである。

では、男は出産しない。子供は女から生まれる。だから「アブラハム、イサクを生み」といふのは適切ではない。さうかといつて一々、アブラハムの妻の名や、イサクの妻の名を持出すわけにも行かない。それで愚かにも淺はかにも「アブラハムはイサクの父」とやつてしまつたのか。と私も一旦はさう推測した。

然しさうではない事が、英語の色々な新しい譯（ヴァアジョン）を読み比べてゐるうちに判つて來た。

二十世紀の數多くの譯（ヴァアジョン）を作り出して來たアメリカの聖書學者達は、男女平等論者、女權論者を恐れ、彼等に噛付かれぬ様、揚足を取られぬ様、用心深く、父系的男性原理的表現を避け、翻譯を穩便^{オクビデン}にをさめてゐるのである。「産む、産まぬ、は女の自由」等といつた險惡^{ケンシヤク}を恐れてゐるのである。

最もひどいのは千九百七十一年版の *New American Standard Bible* で此れは女性原理の *bear* を用ゐて *To Abraham was born Isaac; and to Isaac, Jacob; and to Jacob, Judah and his brothers; …* となつてゐて初めから *To Abraham…; to Isaac…; to Jacob* 形である。

現代の思想から古典を解釋して翻譯するといふ事は、原典を改竄した上で翻譯するに等しい。イエス・キリストの系圖の R.S.V. の譯はまさに改竄翻譯といふべきであり、その改竄譯に日本聖書協會は唯唯諾諾と従つたのである。日本聖書協會はアメリカの R.S.V. に隨順しただけではない。

昭和二十一年「現代かなづかい」と漢字制限が内閣訓令として出れば唯唯諾諾。

昭和二十七年に文部省國語審議會が

◎人稱代名詞は「わたし」「あなた」の使用が望ましい。

◎敬語は「れる」「られる」の使用が望ましい。

といふ建議をすれば直ちに唯唯諾諾として聖書翻譯に於て此れに従つた。

アメリカとお上の言ふ事には唯唯諾諾といふのが日本聖書協會の體質である。

さて、現在日本のキリスト教會でひろく用ゐられてゐる「新協同譯」聖書で、系圖の處がどうなつてゐるかを見よう。

「アブラハムはイサクをもうけ、」とあつて以下終まで「もうけ」で通してゐる。

此れも「アブラハムは妻サラによりてイサクをもうけ」

と云ふ文脈が透けて見えて來る様な女性原理的表現である。「アブラハム、イサクを生み」と云ふ直截簡明で、且つ父系的な表現をどうしても避けたいらしい。

聖書の翻譯に悪い影響を與へてゐるもう一つの勢力は、「差別語 不快語をなくせ」と云つて多くの言葉を抹殺しようとする、言葉の「赤狩り」「魔女狩り」の暴力である。アメリカに始まり、日本にも蔓延して來た此の勢力は、現在讚美歌の歌詞を次々と改竄するといふ事態を齎してゐる。

今回はマタイ傳福音書冒頭のイエス・キリストの系圖の翻譯表現に就て具體的に述べたのであるが、言葉の抹殺と言葉の改悪を齎す「言葉の赤狩り、魔女狩り」の問題に就ては、稿を改めて述べるであらう。

（平成十九年十月）

（まつをかたかのり・彫刻家、元造幣局工藝管理官、

本會常任理事）

契沖と悉曇（その二）

谷田 貝常夫

外國語の學習により

契沖は言ひます。

右の圖梵文に准らへて作れり。

山田孝雄博士の言によると、

これは一般の五十音圖をさして汎く云つたものでは無くて契沖自身の圖が、悉曇三密鈔の圖を準據としてつくつたと云つたのであることは明らかである。

又、

……韻鏡序にも胡僧反切の妙を中華の僧に傳ふといへり。此胡僧といふはいにしへ胡國天竺のわかちをわきまへざりし時、天竺をも胡國といひける故、後に能わきまへても猶昔に准らへて梵僧を胡僧といへるなり。

この反切なる、發音を知る方法も、實は印度から傳はつたものだといふのです。廣島大學の沼本克明教授によると、「中國語に於ける音韻學の發達は佛典漢譯の場での梵語と

の接觸の影響」が色濃いとして反切が盛んになつたこと、他、音譯法などを舉げてゐます。例へば五世紀の鳩摩羅什の佛典翻譯ではraとlaの區別がなく、baとvaの音價がずれてゐるなどの不備のあつたものが、八世紀の不空の譯になるとlaを示すのに羅raに口偏を加へて囉といふ字を作つて區別をし、縛baに口偏を加へて縛でvaを示すやうになつてゐます。因みに、淨嚴はその音圖に注して「 \bar{a} は \bar{r} に包攝される」といつてゐますが、ワ行に充てた \bar{v} では何も説明がありません。

梵字が表音記號に近い文字であつたことが、中國に音韻上の自覺をうながしたと言へ、延いては梵字の音讀が日本にも大きな影響を與へました。「和字正濫鈔」卷一に「梵文ノ和舊譯ノ音ナリ新翻ノ音ハ囀」との注記があるところを見ると、博覽強記の契沖は、waとvaを表記する漢字の變更に氣づいてゐたことになります。ヲヤヤ行のyeの音價も解つてゐたやうに思へてなりません。

契沖は中央の發音を正音とし、東國など地方には濁音が多く劣つた言葉としましたが、その濁音、つまり有聲音の記號表記も沼本教授などの研究により、梵字の學習からもたらされたものとされてゐます。また假名一字で書くのが直音、假名二字以上で書くのが拗音と定義されてゐますが、契沖は『和字正濫通妨抄』の中で「加をへきや」といひ、へくわ」といふことき」が拗音で、「凡拗音直音は悉曇より出たる名目にして、韻鏡等に沙汰なし」と指摘してゐます。

前回に引用した發言から推して、からごころを排斥しながらも本居宣長は梵字に目を通してゐたことは間違なく、漢文に通じてゐたことと相俟つて、國語の研究に外國語學習の必要なことをよく心得てゐました。

因みに、日本人で初めて梵字學と呼べる文字體系を習つたのは空海です。苦勞して長安に到着し、さて佛道、特にその中の密教を學ぼうとしたら梵字の知識が必須だつた。日本ですでに目に觸れてはゐても、本からでは音がわかりません。日本には知る人もゐない。悉皆學んだことのない梵字の、それも音讀が必修と知つて衝撃を受けたに違ひありませんが、そこはさすがに空海、インドから渡來し、當

時長安に居住してゐた般若三藏について梵字を短い期間で修得しました。三ヶ月程と推定されます。その上で不空の弟子惠果和上を初めて訪問し、弟子となつてから三ヶ月ほどの間に胎藏界、金剛界の灌頂を受けた上で、傳法阿闍梨位の灌頂まで受け、密教の奧義を洩れなく傳授されました。梵字を學習してゐたからこそその賜物と言へます。

空海の著作の一つに『吽字義』があります。そこにはまづ字相の解があつて、「吽」一字が四つに分解されます。それが「賀」「阿」「汗」「麼」の四字ですが、漢字でかう竝べられると一體何事の説明かといふかる人が多いのではないでせうか。實はこの四字は假名で書くと「カアウマ」に當りますが、ローマ字表記となると「kaum」、しかも日本人にはhの音が耳に理解できずkとつてゐたので（海のハイをカイと表記）元々の音は「^{haum}」であるものです。

日本では阿吽アウの呼吸などと簡単に發音しますが、「ウン」で表記される文字の蔭にこのやうに複雑な音組織が含まれてゐることなど、漢字や音節文字假名しか知らなかつた明治以前の日本人には理解が難しかつたのではないでせうか。そのやうな觀點から敷衍して想像すると、梵字の修得なかりせば、五十音圖などには思ひも至らなかつたと言へませう。

いろは歌の最後に来る「京」

悉曇に造詣の深かつた契沖であるだけに、古典書などを繙きながらも文章の端々に悉曇學からの視點を失はなかつたと推測されます。そのよい例が「いろは略注」(『和字正濫鈔』卷一)にあります。いろは歌はその四十七字の最後に「ん」または「京」を加へて四十八字だとも言はれます。その京、「終に京の字をおかれたる」意味の探索です。

字母の終に藍「らん」と乞叉「きしゃ」(二合)との二字あり。……乞叉ハ異體重の軌則を示す。異體重とハ梵字の注に別の字を二字三字四五字まで續「つぎ」合せて重ぬるなり。乞叉ハ迦と叉「しゃ」とを合せたる字なり漢字に「きしゃ」といふ一字の音なければ乞叉(二合)と注して梵字にて一字ぞと知らするなり。三合等此に准らへて知べし。

梵字悉曇字母表で、鉢文(子音)の最後にはキシヤといふ文字が來ます。この字はカゐとシヤといふ二つの字を合成して一字にしたもので、漢字にはありません。つまり拗音です。

きやうの三字をもて京の一字の音とするにて餘の二字三字をあはせて一音とする例を彼「かの」乞叉字に准ら

へらるゝ歟。それにつきていづれの字もあるべきに此字をしもおかるゝハ心侍るへきにや。

「きやう」の三字で「京」一字にするのは「キシヤ」になぞらへたものだが、他にいくらかも字があるのにこの字を選んだと云ふのは何か譯があるのだらうかと契沖は疑問を投げかけてそれに答へます。

又乞叉字は異體重の様を示すのみならず都盡の義あり。諸字の義此に至りて盡極する意なれば、彼に准らへておかれは今いふ所の義あるへきにや。又彼乞叉ハ四十七字の内なり。今ハ外なるは哥の字餘りの准らへもあるが上に、假名の數かきり有て、又京はもと和語にあらねはなるべし。

キシヤの意味は「すべて盡きる」であり、すべての文字がこのキシヤに收斂するといふことを喩へてゐるのだらうか。又キシヤは梵字字母表の中にをさまつてゐるが、いろは歌では外にはみ出して字餘りとなつてゐる。京といふ音が元々日本の言葉ではないからだらうか。

いろは歌最後の文字「京」に關するこのやうな推論は、梵字を知らぬ人には思ひもつかない語源解釋ではないでせうか。

(やたがひつねを・本會事務局長、元普連土學園教頭)

縦書きによる理解と表現

文末の重要性

前稿「縦書きの文法的原理」で、國語は文末に決定性があり統括され、これが縦書きに適つてゐると述べた。このことに關し、補足する。

係助詞による係結びの表現は古代で盛んであつたが、中世には論理關係を明確にする表現に變り、衰へた。格助詞は變化が少なく、間投助詞はもとより多くない。終助詞は數が多く、文末に言語主體の立場や氣持を込めて、文を完結する。これは近代日本語が「文末が重くなつて上が軽くなりゆく」ことと軌を一にして、文末の重厚な基盤は強い（池上頑造氏『國語の歴史』近世）。これは英語と比較すればよりよく理解できる。安西徹雄氏の『英語の発想』によれば、英語は「動作主＋他動詞＋目的語」の構文が基本的で最もよく使はれるが、國語では主語が特に明示されないことも多く、物事全體が自然にさうなつたと捉へて表す。このことは、外山滋比古氏が英語は名詞中心構文、國語は

若井勳夫

動詞中心構文と指摘し（『日本語の論理』）、池上嘉彦氏が英語は個體に焦點を當てる「もの指向」、國語は出來事を全體として捉へる「こと指向」と説明する（『「する」と「なる」の言語学』）ことと對應する。國語は動詞ごとに一つの動作や状態を述べ終るのである。これは柳文章氏も「動詞の現われたところで、だいたいな意味を語る部分も分り、思考の流れにひと区切りつく」と、中止法による表現を含めて、動詞の特性を論じてゐる（『比較日本語論』）。動詞は文末で終結し、また、文の途中で中止することによつて、陳述を重ねる。この文法的な特質を表記として定め、支へるのが縦書きであり、縦の流れによつて、上から下への重みをもつて受け止め、確述される（以下、縦・横書きをおほむね縦・横と記す）。

韻文は上の句から下の句へ

短歌で五七五を上句、七七を下句といふのは縦であ

るからこそである。基本的に上の句は作者の問ひや主題の設定、下の句はその答へや解釋である。下の句、とりわけ結句で集約、收束され、引き締める。横にされた短歌はむやみに分解、放散されるだけで、統一性がなくなる。これに關して、池田彌三郎氏は釋超空（折口信夫）の歌を横組みにしたら、句讀點・一字あけ・棒線などは、「決してそのまま、横にならない……不思議な、働きの違い」と述べる。これは俳句でも同じことである。「や、かな、けり」などの切れ字はそこで切斷され、同時に下に續いていく。非連續であつて連續し、高濱虚子のいはゆる二句一章の世界が現成する。芭蕉の「古池や」はここで切れながら「蛙飛び込む水の音」に及んで、對立しつつ包攝しようとして調和する。これは縦によつてこそなされ得る。

歌の修辭法で、枕詞（冠辭）は命名からして縦を前提にして、神や土地を讀へる呪言が固定し、聲調を整へ、下への重みとなつて情調を包む。序詞はある語句を引き出すため、横では對等になつて言ひ起す力も失せる。掛詞は「螢の光」で、「いつしか年もすぎ」「すぎのとを」と、下への重力があつてこそ二重の意味が連想される。これらの修辭は横ではその流れが停滯し、分散し、イメージが廣がることもないだらう。

漫畫の齣と臺詞

漫畫は子供が讀むのを含めて、今なほ縦を守つてゐる。まづ、右開き・右始りで、齣の進み方は右から左へ、繪は上から下へ、小さい齣の分割も同じで、順番の數字を記入する必要がない。吹き出しの臺詞も縦である。「―が……」。「……」。「うーむ」などの言ひさしや問、また、疑問符・感嘆符などは縦であつてこそ意味があつて、有效ではないか。沈黙や空白は何も無いのではなく、意味ある感情が確かに存在し、表現される。それを視覺的に縦の形式で確定する。ただ、例外は、擬音語・擬態語・呼び聲・呼びかけなど、横で書く場合もある。これは大きく、太く、デザイン風に書き表すことが多く、横にして變化をつけ、目立たせる。これは文や文字とは異質の、音聲や效果音である。

身體の動きと感覺

漢字や平假名の筆順や續け方は縦に基づいたもので、連綿と下へ流れる。横では一字づつ小刻みに上から下へ、再び上へと、右にぼつぼつ切れては進んでいく。縦は書きながら上から下への重量を受け止め、自然にうなづいて、腑に落ちるやうに納得する。これこそ古來、日本人が體に刻み込んできた身體感覺である。阿久悠氏は「横書きでは首

を振つてしまふと真顔(？)」といふが、これは冗談ではない。遠近兩用の眼鏡の取扱ひ説明書には「本や新聞などは、自然に視線を下げ……横書きの本などを讀むときは、視線はそのままで、頭を左右に動かして」見るやうに注意する。洋畫の字幕は昔は右方に縦、よほど速い轉換でも斜め讀みしても意味は十分に取れ、畫面とともに見ることができたが、今の下方の横では兩方を速く理解することがやや難しいといはれる。横の飛ばし讀みができないのは、叙述の流れが断切され、それを受け入れる身體の感覚がついていけないからである。

國語は縦書きでなければならぬと早く指摘してゐたのは外山滋比古氏である。アルファベットやローマ數字は縦線を並べることを基本にしてゐるのに對して、漢字や漢數字は横の線が基本である。前者は横に讀むと眼の進行方向に對して垂直に交はる縦線が多いので、眼に抵抗感があつて、はつきりして讀みやすい。一方、後者は横に並べると、眼の方に横線が並行して、識別しがたく讀みにくい。日本人に近視が多くなつた原因の一つに横書きが増えたことがあるのではないかと心配する。

書くことは考へることであり、考へながら書いてゐる。小説家の黒井千次氏は「横に書くと、どうしても何かを積

み上げることが出来ない。言葉と言葉の間に隙間が生じ、文章と文章とが上下の行間でうまく噛み合わない。思考の歩みと手で書くりズムとがうまく同調しない」と分析する(毎日新聞、平成八・二・二二)。横に書くとどこか身體に無理を強ひてゐて、横の文字は形が崩れ、左右も揃はず、段落意識も亂れることは既に私の調査で明らかである。

横書きの姿勢について甲木壽人氏は次の通り警告する。「自分の上体を右側彎にひねつて向かう姿勢の人がほとんど……この姿勢では縦書きができない姿勢であることに氣づかない……くせになり……今の学生たちは将来一〇〇パーセント腰痛者になる危険性がある」と。横書きによる身體の弛みと崩れは精神や感情にも影響を與へるだらう。森信三氏は縦は「情緒の流れ」があるが、横は「生命の流れが寸断されがち」と述べる(『不尽片言』)。

形を整へることは内實を備へることであり、縦の筋を通すことにより、日本人の背骨は眞直ぐ立つのである。

一つの流れとまとまり

我々が讀み、書く時、一字づつ文字の排列を辿つてゐるのではない。一つの語、句、文として意味のある一かたまりのまとまりとして把んで、讀み書きし、語脈、文脈の中

で位置づけてゐる。そこに連続性と完結性があり、文、文章として成り立つ。行替へ、段落、會話なども全體として形を整へようとする。このやうな理解と表現のはたらきは縦の型によつて粹づけられ、明瞭になる。ただ、メモ書きや廣告などで横が見られるのはこのまともりを分斷し、斷裂させ、ここに意圖的に不自然さを出し、逆に注意させるからである。重力のかかる縦に對して、横は軽く廣がり、斷續するだけで連續せず、遂に全體のまともりを缺く。

視野が廣く、見えすぎる横

今なほ目が横に竝んでゐるから横書きが読みやすいといふ俗説がまことしやかに説かれることがある。もとより上下より左右の方が視野が廣いことは誰でも分る。だからといって、左右の範圍が廣がつて読みやすいのだらうか。國立國語研究所の「横組みの字形に関する研究」(昭和三十一年)はじめ、いろいろな調査で常に縦の方が横より速く讀まれるといふ結果が出てゐる。横の讀みにくさについては三浦つとむ氏が『日本語はどういう言語か』で的確に論じてゐる。横では視野が廣くなり、見えすぎて、内容が把みにくくなる。見えることと讀めることとは別のことであり、横は視野が廣がるだけで、それを俗に讀むのが速くな

ると誤解してゐたのであつた。縦は、頭を固定して、視野を狭く定めて、いはば一行に集中して上下の方向を取ればよい。首を左右に振り、文字の列が散漫になる横は頭に入らないといふ學生の意見もある。縦の読みやすさが理論的、體験的に理解できる。

もう一つの俗説は縦は書いた部分が手に隠れて、手が汚れるといふ論法である。宮崎市定氏が『東西交渉史論』で説くやうに、影になるのが書いた部分か、これから書く部分かは優劣の差がなく、そこにそれぞれの傳統の重みがある。これを逆に言ふと、縦はこれから書く部分が見え、横は既に書いた部分が見える。これが思考の深まりや發展にどういふ影響を與へるかは速斷できない。國語の縦書きは單に慣れによるものではない。「言語は傳統そのものである」(宮崎氏)といへるが、それはまた國語の原理や特質、日本人の理解や表現にふさはしい實質が存してゐたのである。

(「日本の教育」第五二號より轉載)
(わかぬいさを・京都産業大學文化學部教授、本會理事)

〈文語の苑〉の四年

愛甲次郎

我々が文語の苑を始めてから早くも四年餘の歲月が流れ、來年はいよいよ五周年を迎へる。戦前の教育を受け、或る程度自由に文語の読み書きができる世代が古希を超え、その世代が去れば文語も死語になるといふ危機意識からボランティア運動として文語保存のため有志が立ち上がったのが平成十五年のことであつた。

昔であれば同人雑誌の發行を企てたであらうが、雑誌は金がかかるし今はインターネットがあるといふことで、先づ手始めに文語専門のウェブサイトを立ち上げることにした。メンバーが書き上げる創作を次々に上掲し、現在ではアクセス数も累積ベースで十萬に近く、サイトとして確立するに至つてゐる。(パソコンをなさる向きは是非「文語の苑」と入れてサイトを覗いて頂きたい。)

サイトを動かし始めて早速問題になつたのは投稿者が我々の世代に限られてゐることである。新人を育成しなけ

れば運動自體の意味がない。そのため有効な手段として大學に文語同好會を作ることにした。お茶の水女子大學の藤原正彦教授のご理解を得て、一年後に茶苑といふサークルが発足し、月一回集まつて勉強會を開くやうになつた。古典の朗讀、解釋、作文の添削指導などをその内容とし、優秀な學生たちは直ぐに文語で書簡を書ける域に達した。しかし學生のサイクルは早く、暫くすると我々を置いて巢立つてしまふ。また茶苑の活動を進めながら、教材の整備の必要を痛感するに至つた。

現在文語學習の潜在的欲求は決して低くはない。しかしそれに應へる構へはほとんどできてゐない。然るべきファシリティを提供するのが文語の苑の使命だと思つてゐる。教材整備の事業としては手始めに古今の名文(短文)百點(一作者一作品)を選び、これに評釋を附して平成百家撰(假稱)とする企畫を進めてゐる。その他の入門書、啓蒙書の出版もこれに續かなくてはならない。

發足以來四年餘できるだけのことはやつて來たが、更にこれを發展させ所期の目的を達成するには、より大きなエネルギーの結集を圖らねばならない。仕事を離れ、經濟的にも肉體的にも時間的にも餘裕を持ち、第二の人生を歩み始めた團塊の世代に、これを期待すべきではなからうか。

思へば會話語から獨立した文章語を持ち、そこに千年の言語傳統を結晶させたことは、世界でも稀な現象であり、わが民族が誇りとすべき歴史的事實であり、それは我々のアイデンティティにも深く係はつてゐる。第二の人生を文語の保存にかける人士の現れることを心から待ち望んでゐる。

最後にさる十月七日、文語の苑の事業に最初から幹事として參加しその學殖をもつて大きな貢獻を果たされた國語問題協議會前事務局長新井寛氏が、文語の苑の懇親會に臨む途上事故に遭ひ逝去されたことは痛恨の極みであり、心から哀悼の意を表してこの稿を終る。

(あいかふじらう・元クウェート大使、文語の苑代表幹事、

本會評議員)



世田谷區日本語教科書瞥見

上西俊雄

山岸徳平『近世漢文學史』の冒頭に『羅山先生行狀記』を引用したくだけりがある。

羅山が『論語集注』の講義を京の町ではじめ、そのとき多くの町人が來聽したために席に入りきれなかつた。それを耳にして、明經道の船橋秀賢ひでながが後陽成帝に、「いにしへより書を講ずる者は必ず敕許を必要とせり。しかるに今、羅山は敕許なくして坊間に講義をなすは不法なり。乞ふ督責せられんことを云々。」と訴へた。帝はそれを徳川家康に廻附された。家康はこれを見て、あざわらつていはく、「何ぞ傷まんや、各々よろしく好むところにしたがふべし。何ぞそれ告訴の淺卑なるや云々。」といつて問題にしなかつた。それで秀賢の訴へは立ち消えになつてしまつた。このやうな訴へが出るほど學問の世襲は進歩に有害であつた。この世襲してそれぞれの學問をうけついでゐる家を師行家しよぎやと稱した。

教育を授けるには敕許が必要であつた。今は文部科學省の許可が必要で、五十音圖ひとつ自由に教へることができない。

教育特區といふのができた。そこではある程度の自由はあるのではないかと思ふが、報じられた限りではほとんどの教育特區が英語に力を入れてゐて、師行家たる文部科學省の意向の外ではない。東京の世田谷區が日本語教育で教育特區になつたといふので、その教科書を手して見た。卷末に「俳句・短歌及び近代の詩の一部は、歴史的假名遣ひとし、右側に現代假名遣ひを添へた。ただし、字音については、すべて現代假名遣ひとした。」とある。

一部とはいへ歴史的假名遣ひを用ゐるのだから相當の英斷といつてよい。しかし右側に現代假名遣ひを添へるのだから、「ゑ」とあれば「え」とルビをつけるわけだ。小學

校で「ゐ」や「ゑ」を教はらなかつた中學生に「ゐ」や「ゑ」にルビをつけるのなら判らなくはない。だが、これから假名を學ぶ小學生に「ゐ」「ゑ」より「い」「え」を特權的に扱ふ理由があるだらうか。あまつさへ「ぢ」「づ」に「じ」「ず」と振假名を附す。子供たちにとつて「ぢ」「づ」より「じ」「ず」の方が易しいとする理由は全くない。

しかしルビを附すとすると厄介なのは「は」行轉呼音だ。本來これは語頭かさうでないかの問題。ところが現代假名遣ひでは轉呼音を助詞に限るので助詞であるかどうかによつてルビの有無が決まる。だからルビのない「は」名詞直後でワ、それ以外ではハと讀むのだと錯覺してしまふだらう。西行の「嘆けとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな」を「月や刃物を」と讀むかもしれないし、藤原實方の「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」を「繪や灰吹き」と讀むかもしれない。

「思はする」や「燃ゆる思ひを」の場合は語中であることが明らかなのでルビがなくても讀み間違ひをするとは思はれない。むしろ元良親王の「わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ」の「はた」に逆のルビ

が欲しくなるではないか。

とにかく現代假名遣ひはそれだけで十分複雑なのだ。それを歴史的假名遣ひとなひ混ぜにするのだから校正も大變であつたであらう。そのことは、たとへば、加賀千代女の「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」の場合と、在原業平の「ちはやぶる神代も聞かず龍田川唐紅に水くくるとは」の「水」の扱ひが同一でない、つまり一度ミヅと振假名をしてから、そのヅにズとルビを振るべきところを、業平の場合にはさうでなくいきなりミズと振つてあることによつても知られるのである。

天智天皇の「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我が衣手は露に濡れつつ」の庵も二重ルビだ。イホとして、そのホにオとルビが重ねてある。しかし、詠み人はいきなりテンジだ。テンチと澄む場合もあるのだから連濁であつて、現代假名遣ひでもテンヂのはずだ。固有名詞だから別扱ひにしたのかもしれない。

假名に假名のルビを附す方式はみにくいだけではない。假名の音價が連続した文字列で決まるといふ感覺の育成を

損なふのだ。日本語教科書を作った人達の意圖はどうあれ、結果的に「は」行轉呼音や「ぬ」「ゑ」「ぢ」「づ」を時代遅れの役たらずのものとする考へを子供たちに刷り込むこととなる。

古典を教へるならすなほにそのまま示して欲しい。また、島崎藤村の「小諸なる古城のほとり」は歴史的假名遣ひ、「椰子の實」は現代假名遣ひ。北原白秋「落葉松」、土井晩翠「荒城の月」も現代假名遣ひだから、音楽の教科書に遠慮したことがうかがへるが、子供にどう説明するのか。むしろ違ひをはつきりさせた方が教へやすいはずだ。以上は望蜀の嘆。

漢字制限については、よくぞここまで籀を外したものと驚く。なんと一二年の教科書に「渡水復渡水」ではじまる高啓の尋胡隱君や「遅日江山麗」ではじまる杜甫の絶句があり、三四年の教科書には論語學而篇最後の「不患人之不知己。患不知人也。」や「月落烏啼霜滿天」ではじまる張繼の楓橋夜泊があるといふ豪華版である。國語教師は久しぶりに腕を撫してゐるのではあるまいか。思へば長い間、教師は國語を教へることを禁じられてゐて、表現された内

容ばかりを問題にしなければならなかつた。本教科書は教師をこの點で解放したわけだ。教育特區とは言へ認可が降りてからの關係者のご苦勞も並み大抵ではなかつた筈だ。世田谷區の試みの更なる發展を祈ること切である。

後書

本稿は平成十九年七月十二日の理事會で報告したものに加筆したものである。

擴張へボン式ではハ行轉呼音を區切り符號とみて逆アポストロフイで表す。ワ行子音と同じく、ア段のときのみ兩唇半母音として實現される。「箱根八里」を轉寫してみる
とモノノフに夫といふ語が透けて見えてくる。このやうな場合は轉呼音にならないわけだ。ハ行轉呼音が語頭かさうでないかの問題だとする所以である。

擴張へボン式については『國語國字』第百八十八號所載の拙稿「にぎたまのローマ字」を参照されたい。なほ入力ミスが一つ。藤が「fu」富士が「fushi」である。

(かみにしとしを・擴張へボン式提唱者、本會評議員)

錠

高崎 一郎

「錠」といふ漢字で認識される言葉は通常

・かぎ。

・薬の形、また単位。といふ二つの意味がある。

漢和字典を見ると「錠」は「漢音テイ・吳音ヂャウ」と

ある。漢音エイ・吳音(イ) ヲウはしばしば對になるし、

また夕行の濁音で「ヂャウ」となるのは、感覺として素直

に理解できるだらう。ただし「かぎ」などの意はどちらも

國訓であつて、漢字の原義は「祭に使ふ高坏」らしい。

ところが國語辭典の記述はだいぶ異なる。たとへば『日本

國語大辭典(第二版)』には

じょう ジャウ【鎖・錠ヂャウ】(「錠」は後世の当て字。)

とある。これだけではわかりにくいから、本文解説も含め

て要約しよう。

・古用例により、この言葉の歴史的假名遣は「ジャウ」である。

・語源は未確定だが、サ(鎖)↓サウ↓ジャウと變化したものらしい。

・よつて漢字は「鎖」が適當ではないか。「錠」は宛字である。

・しかし今さらたとへば「鎖前」などとは書けず、「錠」の慣習は否定できない。

・また「錠劑」の意は國訓ながら漢字の原義につながるものであり、「錠、ヂャウ」でよい。

といふことは、

・漢字は「錠」、それに振り假名をつけるなら「ヂャウ」

・漢字を離れたひらがな書き單獨なら、かぎの意味に限り

「ジャウ」

と考へればよいのだらう。

何とも複雑な話である。「錠」などまだ簡単な方で、た

とへば「頑丈」など手ごはい言葉はいろいろある。漢字が

介在するややこしさだ、と言へばそれまでだが、立場によつ

てものの見かたや整理法が異なるからなのだ、と私は考へる。

しかも江戸時代以來、神佛儒の三つの流れが今も影響して

あると思ふ。

・韻學になつたのは主に佛教であつた。「錠」は「ヂャ

ウ」以外の何物でもない」と考へる。

・國學の立場では、漢字はどうあれ國語の變遷を第一に考へる。よつて古用例「ジャウ」を尊重する。

・唐土に假名遣などないから、漢學者は興味がない。漢和字典は正しい漢字を知るために存在する。

かういふ穿鑿は近代的な表記法として煩瑣に過ぎると、字音のみ「發音式」または現代假名遣支持の意見は根強い。

上述のとほり漢學者はあまり字音にこだはらなかつたし、戦前の『廣辭林』などはさういふ見出し排列で成功したから、實踐上の裏付も十分にある。實用上それでもよいのだと私も思ふ。

ただし「錠」の語源が未確定であるやうに、和語と字音はさうはつきりと分類できるものではない。「硫黄」「格子」など、扱ひに困る語は意外に多い。つまりこれはあくまで便法だと心得ておかないと、「平安時代中期以前の用例に従ふ」ことにならず、明治時代の棒引き假名遣と同じものができあがつてしまふ。

字音假名遣は「表記の揺れ」に過ぎず、假名遣ではない

といふ考へ方がある。これは現代の目で上代を解釋した誤りだと思ふ。なぜなら中世まで「ジャウ」と「ヂャウ」は全く異なる發音なのだから、同一視してどちらも「錠」だと考へる筈がない。たとへば「シウマイ・シュウマイ」は表記の揺れだが、「チュウマイ」とも書けるわけではない。これが遠い將來に同じ發音になつても書き方の區別を維持するのが假名遣である。和語と字音の間に本質的な差はない。

また「トチ（土地）」と「ヂメン（地面）」の整合性が損はれるから、四つ假名のみ區別しようといふ考へ方もある。さうだとすると「錠」は「ヂョウ」となり、これまで存在したことのない書き方を創作せざるを得ない。この方式はまだ「思ひつき」の段階であり、もう少し検討しなければいけないだらう。

日常でかういふ例にぶつかる確率は少い。しかし表記法は本来「困つたとき」のためのものである。啓蒙活動や教育のためなら「うまくゆく例」だけ披露すればすむが、じつは「稀な例」こそ一番大切な「かぎ」である。さう考へて、言葉さがしに勵む毎日である。

(たかさきいちらう・高崎齒科醫院院長、本會評議員)

福田恆存と俳句

鈴木由次

福田恆存についてどうでも言っておきたいことを一寸書きます。福田氏は二十代から三十代の初め、時々俳句を詠まれました。私の覚えてゐるものとしては、

◎ 迎へ火や御靈みたまの道の清げなる

これは終戦前のことですが、ハガキの端に書いてくださったものです。今になれば小生の想像するところとなりませんが、福田先生の初戀の人、岡本八重子さん（美術評論家岡本謙二郎氏の姉君）の新盆の時の作と思ひます。時期が一致しますし、塀に沿つて迎へ火を焚く大邸宅は、根岸の岡本邸ぐらゐだつた。當時他に先生の近親の死者は思ひつきません。

◎ 孤舟去つて月光に湖心定まらんとす

これは岡本家が毎夏別荘代りに一郭を借り受けてゐた精進湖畔の宿屋、太田屋の對岳樓からの葉書の端に書いてあつたものです。先生の二十代の頃でせうか。不思議に、岡本家が新橋で營んでゐた六階建ての牛肉屋も太田屋でした。親戚關係だつたのでせうか。毎夏一家が避暑に行くのに先生も一緒していらつしやいました。私も一度行つてゐます。第一稿「芥川龍之介論」の冒頭の青木ヶ原の描寫は、この地での散歩から生れたものだと思ひます。末尾の「定まらんとす」を長い間、私は「定まりぬ」と覚えてゐましたが、青年期の先生は、湖心がもとに静まりかへるよりも、中途の動的な姿の現状に惹かれたのでせう。「定まりぬ」では雜誌投稿竝みです。そこでハガキを探し出して見直したら「定まらんとす」でした。

これは福田先生の句ではないのですが、

◎ 寒夜妻と死にたきまでに心あひ

といふのが、先生の文章中に引用されてをります。先生の談話から、これが中村草田男の作であることは明らかです。當時「形成」（古今書院）編輯長時代に、先生は中村草田男と親交がありました。また田中美知太郎氏との親交も「形成」を通じてだと思ひます。あらためて調べましたら、この句は、昭和二十四年六月一日糸書房刊『智慧について』の一七一ページ以下の「幸福への意志10死にたきまでに心あひ」にあり、章題にまでなつてゐました。皆終戦前のことです。

三十過ぎても獨身でをられた先生を佐藤春夫さんが「福田は立たないんぢやないか」と言つたのに對し、先生は三十句ほどの艶句を書き、それで佐藤春夫が「まちがつても福田は女を知らないとは言はせない」としたものです。三十歳くらゐの頃でせうか。その三十句、書き留めておかなかつたけれど、再現できるものを、一つだけ覚えてをります。

◎ 牡丹花の崩るや女體うねりあり

多くの福田恆存論の中でいちばん少ないか、缺けてゐるのは「遊び人としての福田恆存」ではないでせうか。息子の逸君もさう書いてゐるやうに思ひます。

（本文は谷田貝常夫氏に、脑梗塞後遺症の小生の亂文をお見せし、更に口述を加へた上で整理していただいたものです。）

（すずきいうじ・元本會理事）

知

受賞

「白川靜賞」を受賞

―植福の教育に邁進したい―

土屋 秀宇

このたび日本漢字教育振興協會が、第二回「白川靜賞」(正式には「立命館白川靜記念東洋文字文化賞」)を受賞した。この賞は、中國古代學の權威 故白川靜博士の偉大な業績をもとに、漢字を中心とした東洋の文字に關する調査・研究・教育等の振興に努力してゐる有爲な人材を奨勵支援するために設けられたものである。

當會の幼兒・兒童への漢字教育普及活動が評價されたものであり、會員の皆さんと共に喜びを分かち合ひたいと思ふ。と同時に、先づ天國の石井勳先生に御報告し感謝申上げたい。今回の受賞は、先生が樹立された石井勳式教育法への表彰以外の何ものでもないからである。

私は今、天國で白川先生と石井先生といふお二人の漢字學の泰斗が漢字教育の將來について談笑してゐるお姿を想像する。白川先生も、戦後教育における漢字漢文教育の衰頹を歎いていらつしやつたからだ。

かつて幸田露伴は『努力論』において、國づくりの源には「植福」の精神が大切であると説いた。一株の樹を植ゑれば、數十、數百顆の實を結び、その實がさらに多くの樹と實を生じといふやうに、實と樹が交互循環して無量の産出を爲す「植福」の行爲こそ大事だといふのである。

この意味において、私共の活動は、まさに植福の行爲そのものと言へるだらう。我國の最大の後繼者である子供達に植ゑた漢字教育の幼樹が、明日は天を衝く巨木に育ち、千顆萬顆の無数の實を結ぶかも知れぬ。なんと楽しい夢のある仕事ではないか。

受賞を勸みに、さらに植福の教育に邁進したいと決意してゐる。

(つちやひでを・日本漢字教育振興協會理事長
本會評議員)

書評

萩野貞樹 『旧かなづかひで書く日本語』(幻冬舎新書)

上田博和

著者は假名遣に關して四年前に『旧かなを樂しむ』を昨年『旧かなと親しむ』をそれぞれ刊行してゐる。最近休刊となつた『俳句朝日』誌上でも同趣旨の講座を連載したことがある。それらの蓄積を下敷にして萩野氏はこの七月に本書を上梓した。これは新書といふ形態で、舊かなづかひを面白く分りやすく説いた、貴重な書物である。

舊かなは「思ひ立つた日から使ふことができる」「新たにおぼえることなどは極くわづかなもの」で、使用頻度を考へると「ハ行動詞と「ゐる」をおぼえただけで舊かなは八割完成」だといふのが著者の主張である。さらに「舊かなといふのはハ行を使ふことだ」と極言したりもする。要點をまづ押へて單純化することで讀者に受け容れやすくしたいといふ氏の願ひの現れであらう。

江戸末期の黒澤翁滿もワイウエオと發音する語中語末の假名遣を「盡くはひふへほの假字なり」とその大旨を説いた。これにはもちろん例外があるのだが、語例の多い方を原則化することで翁滿は假名遣習得法を創始したのである。

翁滿は「活用する語の假名遣は活用の稽古さへできれば

假名も自然に覚えられて間違へないから特に注意する必要もない」と述べたが、萩野氏は舊かなの基礎「動詞・形容詞の活用に關はること、音便の表記のこと、五十音のこと」を新かな世代に丁寧の説明してゆく。ときに話がそれて、口語と文語は分けられないこと文語新かなの愚かさなどを指摘したり、また本筋に戻つたりする。その語り口の妙に身を任せてもいいし、本筋だけを辿つて、舊かなの要點をいち早く掴んでもいい。理解できたら、新かな版の谷崎潤一郎「盲目物語」を舊かな原文に復元するといふ卓抜な練習問題に挑戦してみるのもいい。

いづれにしても、本書の中心となる前半の三つの章は舊かなで文章を書くための手引書として特に有益である。論理に關心を持つ優秀な高校生なら十分に讀めるし、その語り口に引き込まれて、新かなの不合理と舊かなの合理性を教へられるであらう。これからは福田恆存『私の國語教室』ではなく、本書を讀んで舊かなを實踐しようと思ひ立つ人が現れるにちがひない。

(うへだひろかず・都立高校囑託・本會評議員)

俳句・和歌投稿

返返る老ひ悔ひ報ひと多き誤記
しとたるの錯誤正さむ雪間草

新假名の句は春愁を深むるや

美しき母國語の書や星明り

しんかなはみんな誤記とす稻光

音のなきつゆの晴れ間に飛行雲

稠密に空間埋めて蟬時雨

有田宏雲

中村保男

湯河原の川のせせらぎ越え行けば湯煙立てり出湯の熱湯

町田暢人

代行教員を勤めし生徒よりの禮狀に應へしもの

初夏の一期一會を忘るまい我と汝の絆いと強ければ

聖火ランナー募集に際し、生徒の依頼を受け詠みし歌

韓境越ゆる願ひの叶ひせば足をも身をもいと震へまし

韓越えはいかでか慄へ忘るべき政にも心の張れば

法政工學部マンドリン・クラブの司會をせる明るる年に詠む

秋空に響くこの音法政の去年の音色ぞ思ひ出しける

安東之路翠

〔サ行冠〕

興福寺の塔下にて

小壯鹿を筆に寫しつ早春の五重の塔の吠を喚ける

宮島管絃祭

潮待ちの神の御舟のかゝり火を水面に揺らす箏の閑騒

諏訪守屋資料館にて

鈴鐸と大薙鎌の風の祈禱守矢の族の鎮めし諏訪

宇野論語「堯曰」最終章

聖儒なる大樹の下に存へし學びの日々をまさやけく見る

神の諏訪

聰鏡に凍てし湖面を神渡れる碧き岸邊に間歌泉吹きたる

「夕行冠」

『大漢和辭典補卷』を鎌田正先生より拜領せしよろこびを

大漢の餘煖の韻空高く天樂に沸く秋に聞きけり

兩國國技館にて

力水力士はとりぬ古きより潔き神技の土俵の象に

眞壁への道

筑波峯の風にそよぎし山薊家路へ歸る馬の眸親しも

眞夏、薬師三尊の御前にて

天人の奏でる調べ涼やかに奈良の古刹のうつつの刹那

諏訪湖の水結を待ちわぶ

永劫に湖面を神の聖言せる春立つ岸に眸を凝らしをり

「ナ行冠」

御柱祭り

七歳を晒す御柱四方を守り新しいのち宿し屹ち立つ

東照宮拜観の後に

日光の巨き巖根にふくらみて咲くを待ちける晝のかほばな

銅鐸演奏

鐸々懸く太き梁なる大樹なり出雲の奥の構櫓の白櫃

東京都超高層ビル地鎮祭

覽送り到り祝詞も強く神官は土神を祀る今にはほこりて

黄梅山、未開放部落にて

長閑くもみ跡の峰の南邊に直か蒔きの苗青やかに伸ぶ

〔八行冠〕

仙臺青葉神社の婚

華やぎし櫻の下の緋毛氈銀盃に凌ぐ白き御酒はも

天祖神社櫻狩り、宇野精一先生と

ひとひらの花瓣の舞は生けることごとごと篤く教へ諭せり

鹿島神宮にて雷に會ふ

經津主の神一陣の風に守る鹿島香取の陰陽要石

新潟十日町神宮寺

平安の御像と共に説かれたる雪國の慈悲清しかりける尊くもあるか

奉祝の晩餐會にて

奉齋の會の鑑となる人の古事もとほれる御聲透りて

第四回 契沖顯彰短歌大會會員の歌

〈平成十九年二月二十五日於尼崎〉

吉原榮徳

儼として美しき日本守らむと眞言追及し契沖は良し

稻葉和子

契沖が友と逢ふ日を托したる早蕨歌碑に手向けたるあり

契沖の心澄ませし谷川も開發の波に面影もなし

松岡隆範

雨やみて柿の落葉の濡れ色に華やぐ庭となりけるかも

アトリエに籠りてをれば雨樋を流るる水の音きこゆなり

鷗外の語彙調べつつ百あまり八聲の鐘を遠くきくなり

楔型の文字の彫り深し枇杷色のメソポタミアの粘土厚板

氣づかずに通り過ぎむとする吾に聲かくるなり軒の上の猫

市川 浩

契沖を偲ぶ

圓珠庵の近くに育てりといふ人の正かなの翰嬉しびて讀む

谷田貝常夫

契沖所縁の生駒山にて

膽駒山香華絶えせぬ寺なれど契沖しのお静けさあらず

山頂に遊園地あり生駒山目耳ふたぎて風を身に受く

仰ぎこし伊駒のやまにのぼり立ちやまとなにはを振り分けて観る

後書

この十月七日に、前事務局長の新井寛さんが、新宿驛階段での轉倒が原因で急逝された。新井さんは、昭和三十四年の本會創立に参加、以來四十五年にわたつて常任理事をつとめてこられた。著名人を集めることに特別な才能があり、なぜか政治家と繋りが多く、氏の主催するフォーラムに安倍晉三、中川昭一、福田康夫の三人が来て話をしたことがあつた。小生には漢字を諸官廳で共通に使へるやうにすべきだといふ獻策があつたので、新井氏に頼んで共に議員會館の中川代議士の部屋を訪れたことがある。その歸途、總理官邸に行つて福田さんにも會はうといふことになりゲイトまで行くと、當然ながらそこは何人も警官がゐて警備嚴重、始めは堅く斷られたにも拘らず、新井さんが岸井介がどうかうのかうのと話してゐるうちに入れてもらへることになつたのはこちらが驚嘆した。特殊な話術の才といふべきだらう。建替へる直前のライト風の建物で、玄關ホールへ入つてはみたが誰も出てこず、石を木に替へたやうな

和洋折衷の内装を見渡しただけで直きに退去した。奇妙な心情を伴つた、しかし忘れがたい新井さんとの思ひ出である。茲に更めて、心よりの哀悼の意を表します。

會員の加藤征司氏より新井寛さんに對する追悼歌が二首贈られました。

たまきはる いのちのかぎり ことのはと

くにあゆみを たださむとして

かりこもの みだるるみちを ゆくきみの

ますらをすがた いさをしろかも

歴史的假名遣について易しく書かれたものと心掛けてゐたら、『味爽』といふ同人誌に山本直人さんの書かれた「青少年のための假名づかひ問答」が目にとまつた。會員が人に假名遣の説明をするときに役立たうと考へ、轉載の承諾をいただいた。

本會の評議員であり、日本漢字教育振興協會の理事長でもある土屋秀宇さんが、東京の「世田谷教育特區」で小學生用の教科書作りに検討委員として参畫され、石井（勳）式漢字教育の精神を盛込まれた教科書が出来上つた。さらに以後も引續き先生方への指導にあたられてゐるやうで、題は「日本語」だが、國語教育として當今では得がたい成果をあげられてゐます。

ホウムページのURLにドメイン名をとりました。

<<http://kokumonkyo.jp/>>です。

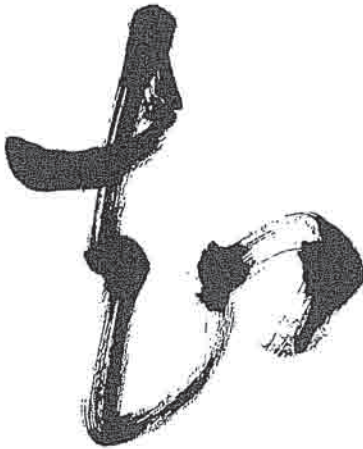
時代の流れで、ホウムページからこの會の存在がわかつた人もをられるので、その充實をはかる努力を始めてゐます。

第一弾として、『國語國字』の内容を逐次上架していくことにしました。まづは一八七號です。「總目次」の中の、読みたい内容の「題名」をクリックすると出て來ます。まづは中山典之圖碁六段の「いろは歌」でお試ください。ただし、第一號から一八五號までは、既に「通卷DVD」として横濱五十番館から發賣してゐますので、そちらでお読みください。

第二弾として、「資料集」といふ項目を新設しました。

太田行藏さんの『國語教育の現状』といふ本が昭和十六年に白水社から上梓され、柳田國男がその序文を書いてゐます。その本を本會が昭和五十三年に復刻出版しましたが、不思議なことに、柳田國男の手書きの序文が本會の事務所書類の合間に残されてゐました。そこで著作権繼承者である柳田富美子さんに連絡し、手稿はお返ししたいが、その畫像はこちらのホウムページに上架させて欲しいと申入れましたところ快諾を受けました。それ以上に、柳田國男の手書きの原稿はたいへん少く貴重だと喜ばれました。それを資料集に入れました。

（事務局長 谷田貝常夫）



正統表記のための実用工具紹介

「國語國字」通巻DVD

本會會報創刊號（昭和三十五年）より第一八五號（平成十七年）迄の全頁をDVD一枚に電子畫像掲載。

税込價格 一二、六〇〇圓 書肆横濱五十番館(<http://literature.jp/>)發行

「今昔文字鏡」單漢字15万字版 ver.4.00 (CD-ROM)

UnicodeのCJKV漢字はもちろん、諸橋大漢和辭典收録の約五萬字、古くは甲骨文字から梵字、現代中國で使はれてゐる簡體字まで、多種多様な文字を收録。廣大な漢字世界を體系づけ、檢索、印字等その用途は無限！

税込價格 二九、四〇〇圓 文字鏡研究会編 紀伊國屋書店刊

「契沖」正統國語ソフト ver.19.0

歴史的假名遣、正漢字をパソコンで完全表現 Vistaでも使へる
字音假名遣による同音異義語の打分けにも威力を發揮

税込價格 二八、三五〇圓 有限會社申申閣 (<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>)

「平成疑問假名遣」(平成十七年版)

字音はもちろん、動植物・地名人名、さらには企業名や専門用語まで、
注意すべき言葉をあまねく網羅。

最新の改訂は(高崎一郎) (<http://homepage3.nifty.com/gimon/>) 参照

税込價格 一、五七五圓 國語問題協議會發行 紀伊國屋書店發賣

關聯電網

- 國語問題協議會 <http://kokumonkyo.jp/>
國語問題協議會傳言板 <http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/>
文語の苑 <http://www008.npp.so-net.ne.jp/bungsono/>
文字鏡研究会 <http://www.mojikyo.org/>
旬申申閣(契沖) <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>
横濱五十番館 <http://literature.jp/>
平成疑問假名遣 <http://homepage3.nifty.com/gimon/>
日本漢字教育振興協會 <http://www.kanji-kyoiku.com/>
石井式國語教育研究会 <http://www.isisiki.co.jp/>
ウエブ柵 <http://www.shigarami.net/>
岡田俊之輔の頁 <http://homepage3.nifty.com/okadash/>
高池法律事務所 <http://www.takaike.com/>
現代國語への處方箋(蓮沼利夫)
http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/
言葉の救はれ—福田恆存論(前田嘉則)
<http://logos.blogzine.jp/1/>

平成十九年十二月二十五日發行

創刊昭和三十五年十二月一日(通卷百八十九號)

國語國字(第百八十九號)

編輯・發行 國語問題協議會

東京都大田區久ヶ原三丁目二十四の六

郵便番號 一四六〇〇八五

電話 〇八〇—三四二—五五〇—

ファックス 〇五〇—三五八八—六七二五

電郵 0359089356@everynet.jp

URL: <http://kokumonkyo.jp/>

組版 有限會社申申閣 東京都大田區

印刷・製本 株式會社賢工製版 東京都港區

平成十九年十二月二十五日發行（第百八十九號）
創刊昭和三十五年十二月一日（通卷百八十九號）

編輯・發行 國語問題協議會

東京都大田區久ヶ原三丁目二十四の六
郵便番號 一四六・〇〇八五
電話 〇八〇三四一・五五〇一
ファックス 〇五〇三五八八六七・一五
電 郵 0359089356 @everynet.jp
URL: <http://kokumonkyo.jp/>